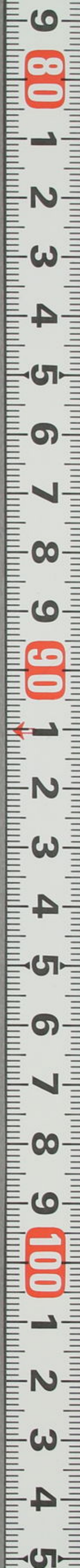


謡曲拾葉抄

梅枝  
富士太鼓  
道明寺  
那那  
安宅

生





梅枝

此法を梅枝と名付らるる越敵樂の唱方小

「梅うえふを常い菓さく」因ふえいふせんお宿る音

とつるふ中つとて梅う枝といふこと。

又富士淺田二人の系人内表少く後法の後

をのゝとひ。富士。淺田ふ村ま〜りり富士

を鼓よあ〜り。又合あ〜り〜

捨くもめらり世中いふ乃漏るりりり

捨くもめらりりり世捨人の廻まこふの隔と

おふは別とらとら。捨くも世とめらりいふ

自他<sup>ニ</sup>の漏<sup>タ</sup>ありありと早下<sup>ヒ</sup>の河少く〜り

毎支

一

是ハ甲斐國乃延山よりありあつる沙門といふ

甲斐國身延山号久遠寺人皇九十代後宇多院

宇多文永十一年六月十七日日蓮上人 辛三歳開基也

上人九ヶ年修行讀誦流法のこと檀越ハ彼木井

南部六郎實長法名号日圓清和天皇より十二代也

身延初ハ葦府と云日蓮改身延

甲斐國ハ國造本紀云甲斐國造纏向日代朝世狹

穂彦王三世孫臣知津彦公比宇塩海足居定賜國

造兵大和本紀云甲斐國ハ昔富士山の麓

竹取翁と云竹を挿く高き者なり或時

竹林小宮乃卵と云く暖玉其後成那彼

翁田と云り小五郎母も乃若と云ひく

之ハ昔姫怒り登富士峯蹴破岩釜走湯田作

る人皆焼く成石祖父祖母遁く行白根高

耕馬皆逃住信列駒高其駒主と不忘常小作

るハ彼るを云ふく洞一なる此処と詞の

國と云然るを假名書小甲斐と云く甲斐

の黒駒と云ハ此駒の復こく沙門ハ田村流

我縁の流生と云ハ交せん多身のちあて縁

我小縁の流生と云ハ交せん我縁乃

流生とつけらるハゆかんと云ふつま

ゆかんと云ハ縁小法縁を縁と云くこの

縁と云ハ

長き法海にお逢ふ村の者よ慈悲とらこ  
 巻一巻との親類又い友とくふ別道してありき  
 じらこ。云縁の無き多等不慈悲とやいこと  
 をとこ 此汝門の目蓮の事流らるる色色の  
 人とら多事知安ふつけらり河。又い上の次  
 才の河等と考ふきい。を以強勝らり出家  
 くら一。但<sup>レ</sup>甚祖の法とてい各別と

▲雲水の力 殺生をふはすと

▲我衣もや後印の 雲深乃衣とらひうけらり。  
 後印の衣とらふはと

▲津の玉 高砂ふはすと

▲正木のうらうら人もあき ぬらうらうらうらと  
 海あり

○後拾 後拾 後拾 後拾 後拾 後拾 後拾 後拾 後拾 後拾

二篇の利益成へた是た 出處一篇の切力の特願不流  
 ▲そあふの山屋のつぶせて ともあふの山屋の赤と  
 とと。百古源ともあふの山屋のちあきぬる海  
 岸にさし住居とら。 無名抄ともあふの小  
 屋にああ一の家乃板敷うともあつて。まづうふ  
 掃くらら半ふ板のま縁うともひらひあき  
 くらとやとらうや

万葉集見抄とらうらうらとらまああくもせせ。

ちししとくくぬりたるものよとて

○きき方のとあふのちかよこあふる毎にぬきぬきと

いぶせくとつるふふは愧憤と云。近材集云いぶ

せくとつるわうりつとつれと。又あつらつとつ

ありとて

○いしとくはのりりりのりあせつとよおむらつとつる

▲吳作 園寺小所不流と

▲薄の岩へうきくた ちきくつとつ愁いしと

近材集云うれとつとつとつとつとつとつとつとつ

○痛しとくさつとつ宿のうきとつとつとつとつとつとつ

▲酒少不雲起く未南不流のぬ乃是 吳服不流

▲枕吹風もくつとつとつとつとつとつとつとつとつとつ

紀名詩云松寒風破旅人夢 朗詠集

▲昔高田天王本不流同とつとつとつとつとつとつとつ

▲此位名ももぬきとつとつとつとつとつとつとつとつ

浅間及ぬきとつとつとつとつとつとつとつとつとつ

或云ぬきとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつ

大木の雲河り此知ぬきとつとつとつとつとつとつとつ

伶人ハ書言故事曰——矣 呂氏春秋曰——矣

天王寺ハ富士太鼓よ流

▲管絃 ぬきとつとつとつとつとつとつとつとつとつ

▲あふいつとつとつとつとつとつとつとつとつとつ

廣博嚴淨經曰女人之性多諸怪嫉矣  
諸法集要經曰女人多諂曲常懷於嫉妬常生和合  
想矣

△敲ハ括ど若し〜多おとろくぬ 凶曉よ後  
△變ハ法極く也と尸せ法花ハ最第一

法華法師品曰藥王今告汝我所說諸經而於此經  
中法華最第一矣 此文の意ハ釈迦一代の所說  
雖有大小權實顯密等不同而於此諸經中法花最  
為第一也と文の意也 文句八曰藥王今告汝  
下第三一行歎經尊妙矣 秀句下曰當知斯法華  
經者諸經之中最為第一釈迦世尊立宗之言法華

為極金口技量深可信受哉矣

△三世の諸仏乃お世の本懐成生成就の直なるなり

法華方便品曰諸佛世尊唯以一大事因緣故出現  
於世矣 文句四曰諸佛覺如實之相衆此實道出  
應於世只令衆生得此真相唯為此事出現於世曾  
無他事除諸法真相餘皆名魔事矣

玄義八曰故知諸佛為大事因緣出現於世只令衆  
生開佛知見見此一實非因果之理耳矣

釈籤一曰出世本意意在仏衆仏衆方名為大事當  
知佛衆只是妙法也矣

此經釈の意ハ三世の諸仏世々普く〜世も亦

ひ説法利益一為本懷者説唯下佛衆法華經  
普及一切衆生為令成如我等在異佛果也曾在他  
事故以法華經為三世諸佛出世本懷云文の念也  
也及といは經とたのりく〜と〜と〜と

〜と〜と〜と

一者不得作梵天王二者帝釈三者魔王四者轉輪聖  
王五者佛身云何女身速得成佛

法苑提婆品の文也是を女の五障と云云何

女身速得成佛ハ云何女身ハ〜速スミヤカ〜成佛

〜と〜と〜と

女ハ〜の際サカイりりと定〜と〜ハ〜今龍女が

速スミヤカ〜成仏と〜と〜と〜と〜と〜と

舍利弗が疑と〜と〜と〜と〜と

大梵天王者西域記曰嚩𑖀摩此翻離欲或云清淨

或云極淨ト矣楞嚴經曰身心妙圓威儀不闕清淨

禁戒加以明悟ト矣荆谿曰梵即色界主亦三界主

餘皆臣屬良由此天内有覺觀外有語言故也ト矣

帝釈者本論曰梵語云釈提桓因秦云能天王合而

言之云釈提婆那民或云釈迦提婆因陀羅今畧云

帝釈ト矣淨名疏曰若此間帝釈是昔迦葉佛滅有

一女人發心修塔復有三十二人發心助修修塔功

德為忉利天主其助修者而作輔臣君臣合之名三

梅枝

十三天<sup>具</sup> 魔王者梵語云魔羅大論曰秦言能奪  
命又翻為障能為修道作障礙故或言惡者<sup>具</sup>  
垂裕云能殺害出世善根者六天上別有魔羅所居  
天他化天接<sup>具</sup> 轉輪聖王者或遮迦越羅此云轉  
輪王俱舍論曰從此洲人壽在量歲乃至八万歲有  
轉輪王生減八万時有情富樂壽量損減衆惡漸盛  
非大人器故在輪王由輪旋轉應導威伏一切名轉  
輪王<sup>具</sup> 佛身者觀經玄義曰言佛者乃是西國  
之正音此土名覺自覺他覺行窮滿名之為佛<sup>具</sup>  
▲るようさうひうりつりつと海乃

阿利ツウ<sup>ウミ</sup> 阿利ツウ海の越中の名詞と。又ハ只ありと云の  
洞河少くつひうりつり

或ハ若有同法者去一不成仏と云々一受世法と  
受人成仏せとと云々なり

法華方便品曰若有同法者去一不成佛<sup>具</sup>

文のふい<sup>ニ</sup> 文のふい<sup>ニ</sup> 文のふい<sup>ニ</sup> 文のふい<sup>ニ</sup>

碧玉寒蘆錐脱囊 野相云の侍也。又上小法と

受持<sup>具</sup> うけたりの<sup>具</sup> 受持<sup>具</sup> 大論曰信力故受念力

故持<sup>具</sup>

▲受成男子の蚤小法と。懺悔ハ實盛し小法と惡趣  
ハ小法と。持名ハ小法と  
亦もせと起もせと

梅枝





楳枝

秘康養生論曰萱草忘憂矣 毛詩曰北堂栽萱草

能忘憂矣 古今采雅抄云とよき草のハ古

よりハ好しき草なる事ハ云ふ事也 萱草のハ

〜の事也 藤原抄云思ふ事ハ知長

とて聖の事ハありて思ふ事ハ

思ふ事ハ思ふ事ハ思ふ事ハ思ふ事ハ

思ふ事ハ思ふ事ハ思ふ事ハ思ふ事ハ

思ふ事ハ思ふ事ハ思ふ事ハ思ふ事ハ

思ふ事ハ思ふ事ハ思ふ事ハ思ふ事ハ

思ふ事ハ思ふ事ハ思ふ事ハ思ふ事ハ

思ふ事ハ思ふ事ハ思ふ事ハ思ふ事ハ

思ふ事ハ思ふ事ハ思ふ事ハ思ふ事ハ

思ふ事ハ思ふ事ハ思ふ事ハ思ふ事ハ

思ふ事ハ思ふ事ハ思ふ事ハ思ふ事ハ

思ふ事ハ思ふ事ハ思ふ事ハ思ふ事ハ

思ふ事ハ思ふ事ハ思ふ事ハ思ふ事ハ

思ふ事ハ思ふ事ハ思ふ事ハ思ふ事ハ

思ふ事ハ思ふ事ハ思ふ事ハ思ふ事ハ

思ふ事ハ思ふ事ハ思ふ事ハ思ふ事ハ

思ふ事ハ思ふ事ハ思ふ事ハ思ふ事ハ

思ふ事ハ思ふ事ハ思ふ事ハ思ふ事ハ

思ふ事ハ思ふ事ハ思ふ事ハ思ふ事ハ

思ふ事ハ思ふ事ハ思ふ事ハ思ふ事ハ

思ふ事ハ思ふ事ハ思ふ事ハ思ふ事ハ

ゆらゆらふ見ゆらゆらありき

▲青海波の浪うしー 青海波のうらみありき

浪及いち鼓の秘るこ。雌浪雄浪とてを

ち鼓のあややき

▲越<sup>エ</sup>殿<sup>テ</sup>樂<sup>ラシ</sup> 拾芥抄云越殿樂盤<sup>ハ</sup>涉<sup>シ</sup>調<sup>テイ</sup>也<sup>ナリ</sup>并舞<sup>シ</sup>矣<sup>ナリ</sup>

色葉字類抄云越<sup>エ</sup>天<sup>テン</sup>樂<sup>ラク</sup>平<sup>ヘイ</sup>調<sup>テイ</sup>也<sup>ナリ</sup> 體源抄云越殿

樂新樂中曲并舞殿字作天<sup>テン</sup>本<sup>ホン</sup>平<sup>ヘイ</sup>調<sup>テイ</sup>曲<sup>キョク</sup>也<sup>ナリ</sup>名<sup>ナ</sup>林鐘州

林羽越天此破渡黃鍾調安城樂為平調之物矣

▲梅う枝小こを響い糸とく凡ふいふせんを

やりの響 越殿糸の唱ふを

▲響のなまよ誘引せしきて花の浪ふありき

白氏文集十八云鶯声誘引來<sup>キ</sup>花<sup>ハ</sup>下<sup>カ</sup>草<sup>ソウ</sup>色<sup>シキ</sup>拘<sup>コ</sup>田<sup>テン</sup>坐<sup>ザ</sup>水

邊<sup>ヘ</sup>矣<sup>ナリ</sup> 誘引いさそりき。拘田ハかりりき

りりしき

後撰

○響の鳴るるなまふさりのまて花のトもあはる

▲是こして女のまともありおま<sup>サ</sup>恋<sup>レ</sup>の樂

拾芥抄云想夫憇平調樂也并舞矣

文集韻府等よの想夫憇とを

花多餘情云唐書よの想夫憇とを。日本よの

想夫恋とを同心こ。まともありきありき。

女いそのりして引へしき

盛衰記云仲<sup>ナカ</sup>由<sup>ユ</sup>若<sup>ニ</sup>我<sup>ガ</sup>の法<sup>ホウ</sup>備<sup>ヒ</sup>小<sup>コ</sup>督<sup>カウ</sup>の局<sup>キョク</sup>と

為りく其琴をそくまを志ひて為り  
しよし。志ま急と云樂也。文畧

沈然多々さうぬきんともふの女男を為り

其の名よの水と。中相府甚文字のうら

と。晋の王侯大はとてあふららとを極く

せせし一対の樂こ。是より大はと甚府し子

太平廣記二百四十二繆誤部曰唐司空于頔以樂

曲有想夫憐之名嫌其不雅將欲改之客有笑曰南

朝相府曾有瑞蓮改哥為相府蓮自是后人詔誤及

不改矣

富士太鼓

此儀よりゆり処。萩原院の時時富士淺間とく二

人の樂人。管絃の役をゆりゆひ。淺るるをさす

とらる。ゆりのまよゆりやあつた。今業大系

圖云苑園院。院。萩原。院。伊守。文保三年十一月大嘗

會の月。正之位中將者淺有。時。清暑堂神真拍

子。小糸佐とら。妙ふ。陣中。小おひく。歌人。討之。後日

の相。多し。とら。今。夜。抄。子。勤。心。紙。屋。川。歌。者

と。進。と。討。し。以。史。と。依。而。歌。者。の。歌。を。亦。飛。せ

ら。と。と。と。此。等。の。歌。と。亦。く。名。と。う。く。亦。と。う

ゆ。ゆ。ゆ。の。歌。と。又。樂。人。の。名。ふ。又。士。淺。る。し

ともいふことありき。とていふかめく

▲是の萩原院ははるまの所なり

九十四代花園院亦号萩原院諱富仁伏見弟二子  
母頭親門院藤原原子。尤大臣實雄女也。延慶元年  
戊申十一月廿六日即位。治天下。十一年。文保二年  
讓位。建武二年出家。法諱遍行。貞和四年十一月十  
一日崩。云云。后下ハ葵とふは

▲板も四裏よ七日の管絃の由なり

内裏ハ大内ヲ云。おら禁中を内と云。

帝ハ卷之四のハおのりて。漢鼂錯傳曰天

子宮禁謂之内。漢制天子内中曰行内。行内猶禁中

也。兵。管絃ハ。文選註曰吹曰管。拊曰絃。兵

笙笛簫篳篥都て吹物と管と云。琴瑟琵琶等乃

ひと物と絃と云。又。管と云。樂器別より。

説文曰管六孔。兵。應劭云長一尺六寸。兵

▲天王寺より後君とて樂人

禁中の系人の後即位下す。叙し。多。天子御  
所。絶る。正位。よふも。ひ。云。天王寺  
の系人の。天子の御所より。今。小。傳。来。と。り。

天王寺在。攝。別。東。生。都。名。荒。陵。山。敬。田。院。亦。号。荒。陵  
寺。難。波。大。寺。堀。江。寺。法。花。園。東。西。八。町。南。北。六。町。今  
之。天。王。寺。是。也。三。十。二。代。用。明。天。皇。二。年。丁。未。八

取皇子討守屋皇子斬白膠木刻四天王像安髮中  
癸太誓曰官兵得勝當建護世四天王寺守屋亡乃  
於玉造岸上營寺安四王像五年後推古天皇元年  
癸巳移雞波荒陵東故曰荒陵寺又此內建悲田敬  
田之二院故号敬田院南北一里東西里餘有池曰  
荒陵池元亨叙書  
帝王編年記云推古天皇元年癸丑太子撰津国西  
生郡玉造岸上卓創四天王寺依守屋追討之願也  
守屋資財田宅皆為寺領宝塔金堂者相當于極樂  
淨土東門中心矣

いひはるしびるしを鼓のよふしと

風俗通曰鼓者春分之音万物皆鼓中而出以助万  
物發生故謂之鼓矣 器錄曰蓋鼓勇也定也矣

帝王世紀曰黃帝殺夔以其皮為鼓矣 肅雅曰大鼓  
謂之鼗矣 通考曰後世太鼓古鼗鼓也矣 陳氏

樂書曰鼓之小者謂之鼗大者謂之鼗又曰鼓之制  
始於伊耆氏少昊氏夏后氏加四足謂之足鼓商人  
貫之以柱謂之楹鼓周人懸而擊之謂之懸鼓矣

よふハ鼓よ住者いふのゆふといふと

ふらなる後居の搦りゆらしといふ鼓士の種乃  
うひやなる後 後撰集歌外の部に鼓のがふと  
後居のふもゆふといふと 和歌ふなるの

よりなる人は葉おつりして  
そのふい駿河が葉おつりして富士の煙しあり  
清原の煙名たりし人の富士うひなりと早下し  
れえ富士清原しつる系人の名よりして此方  
と愛よ水おしり

▲あつらひ清原のまこととる物とし勅使の  
しりて重て富士とり者もすくいと後不清原此由  
とてあつらひと富士が振舞うるして彼名あし押  
あつらひとく富士と付く

此河つとささりし梅が枝の徳は色  
るの富士はた敵の役作付しりしより清原  
遺恨はあつらひと付しりしをすえりし此徳  
よの清原不作付しりしより富士は恨らる  
昔とあしと付しりしをすえり

あつらひとく富士は清原の徳は色  
▲まのこれよりなる富士のりあしとるひん

富士山在駿河国富士郡故名富士山富士清原大  
権現在富士山一宮記云富士権現大山祇女木花  
岡耶姫命也兵 平城天皇大同元年建社於山嶺  
号浅间大権現役行者始登山云云  
空海円珍两大師多作佛像寄之延喜年中勸請富

士本宮神於蘇祢之新宮山之北甲州口有萃表額  
曰三國第一山矣 富士山のとうとういふをく  
とくしてあるぬい煥祖よりくうをいひ駿河  
はのふとも富士の形は同一やうふんぬりし  
又後とくく林をとりくもこの世安よ  
ましく煥祖よりぬりし。ほろが原よりんをいひ  
このよりよりぬりし。新根山後念成の  
ふゆよりぬりし。ふんをくぬい煥祖し。  
あしく富士の東八州よりぬりし。天童書よ  
富慈。義楚六帖よ富士。婦人富士。大明一統志よ  
不ろく不兒。旧事本紀よ降士と云。

躬恒秘藏抄云富士十名藤嶽鳴沢高根常盤山塵  
山二十山三重山新山見出山三上山神路山矣  
藤地まゝ急の中ふんくのふんく  
其外般若山。紫山。まろりし山。附あしぬりし  
下学集云不尽山此山至高而瞻望不尽故云不尽  
山又四時之雪不尽故云介富士者此山之神女体  
而心欲富勇士故世俗祝以名富士也矣  
詞林采葉云富士縁起云此山者月氏七嶋第三也  
天皇列擲三年飛來我朝故云新山本号般若山其  
形似蓮花頂上八葉也中央有大窪窪底湛滿池水  
色如青藍下畧 旧事本紀云孝靈天皇三十六年正



月駿河国東西南北刺国中出大海一夜從海中出  
 大山埋一曰從天雲降磐土續嶺像如八坂瓊又若  
 精米累絶頂見天女十五童左右又鬼伯天兵群々  
 左右兵 万乘以是抄云留土とい大志がしと云河  
 こはいふへはち小大志を法つる河をさだふて  
 るい黒色をあらうりて河をさす。糖よりくさるへし  
 細きいせりとい則りありまじしと云河さす  
 私云留土とい孝具天女の因一夜は酒をさす法  
 さふあそりさすい四事夕紀の伝ふ事つとせあけい  
 つるれ伝ふる集ふ色赤人留土といとせあけい

河さす布土の言根と云の系下畧

此方をさすくふる付い留土とい新伝よりありまじり  
新拾 新伝より糖絶てありの根い意やつりてとせあかん 素羅法師

○大うい満くもさえぬ新伝よりなるあつてくやの印云 雅  
音

▲津のふ まのゆよはる

▲うらうらが妻もた鼓の後

女房の方より髪を掃く妻しつとせせり柏油あはる  
 らふかり月のぬかをさる袖の潤うと

右方より髪をさる髪とつらと髪ふつひうけしり  
 匠材集ふ力をさる髪いさう髪と潤ふあはるはる  
 然レハレいさひいさく潤とつとせ



うらうらと池のついでにさしよるやうに今とめられ  
りたりとやと勅書つらふもつらゆしよ。さて是を  
ゆきしよみしよらうらうらと作しよしよ。各各  
とPさるるゆいねの本のるるよPしよくもくもく  
Pしよらと。ゆいねの色もゆらうらよ長く守り  
よや。愚老いねのむすうらうらとPしよくもく  
ゆらと。つらとこのうらうらとさうらんさねの定め  
くくしよ。孫政友有家物はなへねのひよとく  
むらうらうらうらんとPしよくもくもく

△山城通小町よゆと。男心は女命は小波を

△八段ふいのり掛帯の 掛帯は巫女の服く。或は

源とらハ契後小波を。ゆいの珠ハ盛久小波を  
沅水羅紋海燕回柳條牽恨到荆臺

三昧詩李群玉送客詩也。沅水ハあの名。羅紋ハ浪の

紋ハ海燕回と云も名。まきの京をまつらる。柳  
條ハ離別小用。浩く。荆臺ハ在江陵府。楚王遊荆

臺即此也。方与勝寛曰荆臺在監利縣西三十里  
土列之南矣。又云沅水在辰州沅陵西矣

△今ぞゆい法ふあひ竹の 竹とらてハ唐竹。ゆい竹

ゆい竹。志の竹。なま竹。さ竹。村竹。さ竹。ま竹。  
あま竹。ま竹。ま竹。ま竹。ま竹。のうけ。ま竹。  
い竹。ま竹。ま竹。ま竹。ま竹。ま竹。ま竹。ま竹。ま竹。

法行抄

あひ竹と云はつやまのさうをみあはるま。

今案體源抄小笠小合竹と云夏あり十二調子の内一

調子と云ふ本をて調へいひ其四本を合竹

と云。徳小つつけらあひ竹も是と云ふ一

●あひ竹と云はつやまのさうをみあはるま。

▲衆生称念必得往生

無量壽経曰衆生称念必得

▲忽然 野宮小波と

▲鳥帽子も柳さびら有振なり

鳥帽子小柳依比。或いは鳥帽子と云ふ。五位の

法人等著之。私云柳さびと云は鳥帽子の意也。

鳥帽子と云ふ。鳥甲へ天照を伴天の忠戸ふこり。

世はふ所。法林林あを奏し。常世の長鳴ると云

し。の法ふる神代事ふる。長鳴ると云庭音

と云ふ。ゆり小鳥甲の形は長鳴ると表し。

のこし已上師伝 唐と云ふも鳥甲あり。鶡冠と云ふ

千家詩註云鶡冠隱士之冠以勇雉毛為冠也

本草綱目云鶡鷄出上黨魏武帝賦云鶡鷄猛氣其

闘期於必死今人以鶡為冠象此也

論語日子曰不在其位不謀其政

富太波



後陳懸者次茅上數不定九度左右備懸者次茅上  
數不定七度橫鎗懸者乱調子也矣

のり根ここのり音やな ここの後音考こ

の孤箏と云歟。蘇子瞻前赤壁賦曰客有吹

洞蕭者倚歌而和之其声嗚々然如怨如慕如泣如

訴餘音嫋々不絶如續舞幽壑之潛蛟泣孤舟之箏

婦上下畧 右の孤舟の孤乃字く箏婦の箏の字

ととて而て孤箏の後音と云也孤舟ハひとり

舟也箏婦ハやりの女ともあり又士が妻もや

めるれハ此の儀と赤壁賦の文とよくお似たり

真志の縮ハ東君居方不後也冷人の意ハ梅が枝也

廿内侍命婦もくも無る中ハ位のあよりり

比色絶後みくうりも此ハ入楚玄掛帯とい

およりふてりもよ女のうり帯也唐衣のハ腰と

云く唐衣小といふり相と小孫引徳とくも一

後小玉も給て絶の上よ玉とよりりてりり

女ハ掛帯といふこと俤の比れ絶の比れ只相の

比れりもこととくハ後へりハ後へり

△ささハ法おひ合せり多の也

周礼春官曰占夢以日月星辰占六夢之吉凶注六

夢者正夢噩夢思夢寤夢喜夢懼夢矣

劉向新序曰諸侯夢惡則修德大夫夢惡則修官士

毛里大皮

夢悪則修身如是則禍不至矣 大論曰五夢一熱  
氣多故夢火二冷氣多夢水三風氣多飛空四見聞  
多入夢五天神与矣 法數云四夢一在明習氣夢  
二善惡先徵夢三四大偏增夢四巡遊曰識夢矣  
善見律云四夢四大不和夢先見夢天人夢相夢矣  
東萊讀書記曰一躰盈虛消息通於天地應於物類  
故陰氣壯則夢涉大水恐懼陽氣壯則夢涉大火燔  
炳陰陽同壯則夢生殺甚飽則夢施甚飢則夢取是  
以浮虛為病者夢揚以沉實為病者夢溺藉帶而寢  
則夢蛇飛鳥啣髮則夢飛矣

▲甲斐もろもろの融は後を待たねばは後を  
及のトひやうくは 必とせぬうらのあはれを  
子孫の定まらぬくひやうくはるるをいとおとし。

書言故事云国史纂異曰箇立本家代善盡到荆列  
觀張僧繇旧迹初住曰虚得名耳明日又住曰猶是  
近代佳手明日又住曰名下定在虚士坐臥觀畫由  
宿其下十日不能去矣 尺素住来云守治者當代  
近來御賞翫梅尾者此間雖衰微之躰名下不虛矣  
頼朝の雲晴くみ常楽を打込く

本文よ五常ありてとく常の字清くうらみ  
りたり。但し徳のふいせのふ際とみ常ありといひ  
たり。此は三升ちふ清とみ清は梅が枝ふれと。

東鑑云重衡先吹五常樂為下官以可為後生樂  
是くお似たり千壽よはと

聖廟神位  
○世中と何欲くらん流川のこまうらうらうめとへんひる

體源抄云五常樂中曲或中大曲新樂又名五聖樂  
礼義樂或譜云大食調曲又博雅三位說此曲入平

調云唐太宗朝貞觀末天觀初帝製五常樂曲圖  
五常公作之云仁義礼智信謂之五常此人可常

行也五常即配五音此曲能備五音云抑平調金  
音也此音ハ義徳よまろ。而此調子の糸乃中殊小

八帝糸乃名とひくろる。此樂の糸乃一音を以て  
名としく修五常と調るが成と五常樂と云へ

仁義礼智信也土の糸玉よ修徳あるへ水ハ北國の  
信礼あり。如此五常と調る成よよよ義ありト

よ礼あり。玉の糸乃小の中殊小  
五常樂と云云

修羅のち鼓ハあやとぬ 惠心云明阿脩羅道者有  
二根本勝者住須弥山北巨海之底劣者在四大洲

間山巖中雲雷鳴是謂天鼓怖畏周章心大戦慄矣  
く修羅のち鼓ハ。修羅ハ屋為よ記と

千秋樂 ちみよはと  
太平樂 拾芥抄云大食調也 兵 體源抄云武將

太平樂中曲新樂又稱武昌樂号巾舞又謂項莊鴻



門曲常云太平樂或云拔劍舞之曲云

群書會要曰立部伎八部樂一安樂後周平奇所作

也周代為之城舞二太平樂又謂之五方師子舞矣

自是沈よりくさるぬとの端と依めやりてよりひさかたを

舞のよ乃 拾芥抄云陵王壹越起内沙陀調曲也

魏源抄云羅陵王名蘭陵王没日還午樂日檢返手

「今も世ふひひとことごとくうりよをのよ袖の命をりり

淮南子曰魯陽公与韓戰日暮援戈麾之日還三舍

源氏物語云云云云云云云云云云云云云云云云云云

あうくさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう

あうくさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう

あうくさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう

あうく

道明寺

河内国志貴郡土師里道明寺号土師寺源家之尼  
寺也本尊十一面観音御長三尺天神之御作也寺  
領百七十石 道明寺縁起云當寺往昔推古天皇  
御願聖徳太子開基土師連八嶋奉勅造寺於土師  
里也此寺小菅相画の仙母<sup>オホ</sup>は<sup>コ</sup>カ<sup>カ</sup>と<sup>ロ</sup>カ<sup>ユ</sup>  
リ<sup>イ</sup>と<sup>ト</sup>菅お<sup>ヒ</sup>兼た<sup>ト</sup>乃<sup>ハ</sup>山<sup>ノ</sup>跡<sup>ニ</sup>を<sup>シ</sup>ま<sup>シ</sup>り<sup>セ</sup>  
給<sup>ヒ</sup>夜も<sup>ト</sup>り<sup>リ</sup>山<sup>ノ</sup>お<sup>ハ</sup>つ<sup>ク</sup>り<sup>ク</sup>小<sup>ノ</sup>東<sup>ノ</sup>雲  
の<sup>ニ</sup>鶴<sup>ノ</sup>り<sup>ク</sup>り<sup>ク</sup>り<sup>ク</sup>り<sup>ク</sup>

「鳴いそ別道とつぎの林のさくらえぬ里の境もか  
りまじり此里小の庭なるをうらむと尸はさか

道明寺

るり。干時管之死所とて薨トシテ居りてのち。  
村上天皇天曆九年菅霊を都小野小後し  
湯社を建同、年爰所乃明寺ありと云所の同示  
湯社とてそ。た有ふ松櫻と括く天潢人自在  
天神と崇め居り也

同縁起云土師里と云仁天皇の湯宮野  
見岩跡小娘と土師の姓となすりりてより  
里の名とて。此地と云と。敏達天皇の御宇。  
工師八流小あり。相継く住居と。干時聖  
徳太子伽藍建立の志ありと。八流力と合せ自  
の住宅と捨く。梵刹と云せり。とて

家の氏寺也已上 江談云菅家本姓土師氏也何

内国土師寺是其先祖氏寺也矣 色葉字類抄云

土師寺号道明寺土師氏寺也俗為菅原本姓菅家  
氏寺也矣 同縁起云元慶八年菅相出於美

奈小部の本業純と書写と。此純と細じ一  
と地と求め給ふ。講堂の右乃傍小のりて。  
石函と云。此純と彼函小細めと土と云て  
上と云。其後うの塚より木楡樹自然小  
生む。年々あけとてふ。一とせ甲録のとき  
りいふあひて。括りて。其根は純りて二分

杖をよきとて。今ふありて。盛ん。人々此実  
とくありて。杖をよきとて。盛ん。人々此実

同縁起云相模田代寺の善性より久しき僧。後

此善性寺ふふ菴とらる。甲子十七日。我々今代乃

後。ろくろ。此向方。相模ふ。此生。せし。の。後。と

一。ふ。不。然。然。り。り。の。あり。夜。の。夢。よ。田。代。と。ら

如來の善性寺。ふふ菴とらる。甲子十七日。我々今代乃

ゆき。こ。こ。こ。こ。と。て。杖。を。よ。き。と。て。盛。ん。人。々。此。実

修。乃。せ。の。決。定。一。て。相。模。ふ。生。ま。る。ん。の。の。ふ

楳樹ハ。河。原。土。師。寺。ふ。り。り。と。ら。る。善。性。と。ま。さ

物。と。ら。る。ん。と。て。相。模。子。と。ら。る。ん。の。の。善。性。と

ゆ。く。急。教。と。ら。る。ん。の。の。こ。と。と。ら。る。ん。の。の。臨。終

終。西。念。ふ。一。て。往。生。の。本。意。と。ら。ら。る。ん。の。の

善。性。の。白。ち。ま。乃。神。の。化。現。と。ら。ら。る。ん。の。の。こ。と。と

▲善性寺の善性と名をよきとて。やけの清きなるん

此。僧。善。性。寺。の。如。來。乃。と。ら。ら。る。ん。の。の。後。と。ら。ら。る。ん

ふ。乃。明。と。ら。ら。る。ん。の。の。後。と。ら。ら。る。ん。の。の。次。子。の。相。模。善。性

寺。如。來。と。ら。ら。る。ん。の。の。後。と。ら。ら。る。ん。の。の。

▲相模小田代者ハ相模小田代シ。尸取。善。性。と。ら。ら。る。ん。の。の。者

と。ら。ら。る。ん。の。の。相。模。國。ハ。氣。清。ふ。後。と。ら。ら。る。ん。の。の。

田代と云ふハ田代冠者修徳ヲ四終ララるガ。善。性

田代と云。田代寺の西乃方を田代屋敷と  
云。今うの島也。田代寺の号。普門寺妙寺也  
の東南也。安楽院乃東寺也。堂の額小白  
と云ふと云。本寺の千石親意也。坂東  
順礼札所の所也。名性。田代寺。ふとあり  
出家あり。一。出家あり。と云。尋ねり。一。  
善光寺の如來の相崎。河内山の宗女。長月の  
和装侍。梢の結り也。系不流也。

寺りやあるを乃一の里 檀の本乃紅を  
いひけり。黄檀の漆ぬらでの敷也。そと  
秋。其。実。漏。燭。小。作。り。也。

本草綱目云黄檀生山谷葉圓木黃可染黃色

天子御袍稱黃檀深是也

▲天照神乃文守也 天照神の天後を也と云。  
文守といふは。習合をぬく。ある法を交す  
と云。候。不流也。

▲値遇 盛久小流と

▲神さがるねの十ゆりも代乃秋

神さがるの神さびと云ふ等。一。候。不流也。  
十ゆりのも。小流也

徳後撰  
○神さがる葛塚とのも。久の。朝。わ。る。ま。の。ま。ら。く。候。不流也

▲宮路久一と。獨羅乃 獨羅といふ。一。と云

いん杭河。或云大難を志りたりんが  
まのうさこといふ

▲其の神木。聖の慈の柳。信法由の義年。香の  
衣小香の製岩の盛久小伝と。

▲志り〜の五畿内河内。必土師寺の

山城大和河内和泉摂津是。云畿内五箇國  
日本紀云孝徳天皇二年春正月詔曰凡畿内東自  
名壘横河以来南自紀伊兄山以来西自赤石櫛洲  
以来北自近江狭々浪合坂山以来為畿内國  
大和奉紀云畿内といはれり國の中なる所今  
の五箇國とい日本國乃中央と云也。畿内

畿の字の通と漢語小畿云なる所小畿とい  
え也。又畿の字の回といあり。此を中小屋て  
此方とめらる也。問云日本國をハ小分爲  
七ヶ國小道の字あり。何を畿内とい及の字  
なるや。答云畿内は日本字の伊予と通と  
小の所及の字と不分也。東海及び東等法  
此と号とら。是の畿内と申す。勅使と  
法由へ下さる。順の多也。仍而畿内五箇國  
也。諸社根元記云畿内といは城千里と  
畿と云。其の小の此と。是の律代乃あり。大  
照と律天と少く機を感沙ひ。一と殿乃

打掩ひしる分際比ふヶ中のとらるるあふ接の  
日くえん少く。幾日くりや也

説文曰幾天子都也或作圻二兵 左傳曰昔天子之

地云一圻注千里曰圻二兵 吳氏季子曰古者方千

里曰王幾蓋自東而西自南而北皆千里也千里之

内為幾二兵 類説拾遺曰帝幾千里象日月徑圓故

曰日幾二兵

被所小神明と初めもり七法の神くと初法

尸さんしり 南西小多る知い水野本及及

末法の神等系之。或いふ、後日、命、白、山、福

土部の大乗経法華經

五部大乗経者 第一大方廣佛華嚴經六十卷東

晋佛馱密多訳也 第二大集経日藏分月藏分合

五十卷北凉曇無讖訳也 第三大品般若経三十

卷姚秦羅什共僧叡等訳也 第四妙法華経八卷

同訳也 第五大般涅槃経四十卷大集経同訳也

已上 供養の字義の源氏供養小注と

△も油より本徳樹の生し出り其菓ととり教

法と一念心百遍りてべ往生疑ありはと

あつてまよふぬ 本草細目崔豹古今注曰世人

相傳以此木為器用以厭鬼魅故号曰并患人詛為

木患又云高山大樹也。子思如漆珠。今秋氏取為念珠矣。多識編云。在患子。今俗云菩提樹。異名油珠子矣。木德經曰。若欲滅煩惱障報障者。當貫木德子一百一十八。以常自隨。若行若坐。恒當至心。并分散。意稱。弘陀達磨僧伽名。乃過一木德子。如是漸次度。木德子若十若二十若百若千。乃至百千萬。若能滿二十万遍。身心不乱。并諸諂曲者。捨命得生。第三。燄天衣食自然常安樂。行若復滿一百万遍者。當得劫除百八結業。始名背生死流。趣向泥洹。永劫煩惱根。獲并上果。上下畧。選批疑抄云。道綽曰。須依小阿彌陀經。一七日相續。每間念名号。若滿一百万遍。必得往生。上下畧。以上乃明寺緣起。と云く仍るこ  
と小記と

▲天神とリ小其御を比較せ世觀も少く有り  
まこととや 本朝文粹云。江匡衡奉天滿宮祭文。  
云天滿自在天神。或壇梅於天下。而神導於一人。或  
日月於天上。照臨於万民。就中文道之太祖。風月之  
本主也。下畧。其夜の多む。小匡衡我小匡衡  
不よりこなり。但天よ小日月とてと云  
句。我小敬よりと。亦ハ十一面觀音と云  
作くるくとりんく受ふめゆと云々。  
是より天神の御を比較せるといふ事あり。



江記 救世観音者 弘猛海惠經曰衆生有苦三  
救我名不往救者不取正覺 眞 觀世音菩薩の  
世間の善悪を觀し救ふ。自在小救を志す  
お小救世といふこと

▲昔在靈山名法花今在西方名阿弥陀娑婆示現觀世  
音三世利益同一躰 盛久少流と

▲其外鉢や仏といふ唯是水波の濁少く鉢は一如  
るる寺の名乃及あきらかなるるぬ鉢の  
まをすといふこと

鉢は水波の濁少くといふ鉢は本地佛の臺  
鉢根本一躰といふこと。鉢は衆生の救の鉢  
をさといふこと。寺の名乃及あきらかなるる  
りといふこと。

▲更佛の昔鉢乃今五々の時代ふあつた  
佛の昔といふ世尊の在世を云。鉢の今といふ  
天照を鉢より今日と云。五々の時代  
といふ入滅の後。五々二十又百々の末法の  
初。菅原の初。五々の初。五々の初。五々の初。  
正像末の沙汰ハ東居居古不流と

三月下の又月とて初をさすせはひつ  
二月廿五日ハ菅原配初とて薨ト初不見  
初をさすせはひつハ昌泰元年正月廿日

菟葉く流き流かへさふ定りて二月  
節日ふ節をささせ流せと古記あり。

さささささいま林陰ふ流と。

▲表りよむ宿の栢をゆくもろくとも不ゆり  
見りてさる 拾遺集別不賜を政大後の山分と。

ふりゆりゆりふりゆりゆりゆりゆりゆり  
ふりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり

ほりひとこせとくゆりゆりゆり。

菅家た述の山時水乃方一つり一流か方と。

▲表ふたふつりゆりゆり 菟葉をひひゆり。

▲大阿部の由ふ 大難天下 大難天下 大難天下

ひりゆいもんぬの栢河と。部のふへ田村ふ流と。

万葉伝え抄え部へ田舎と。日のをささりゆり

流ふゆ。髪とさらいひゆりゆりゆりゆりゆり

流ふゆゆりゆり。長時不ぬのやとささりゆりゆり

流くゆ。天さざりひりゆりゆりゆりゆりゆり。

○天ささりひりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり

▲ゆりゆり都府栢の瓦観音寺の鐘乃を多節を流

ひりゆりゆり 菅家後集云都府栢終者瓦色観音

寺只聴鐘声矣 是ハ菅家配ふゆりゆりゆり

侍と。都府ゆり都督府也。太宰府是也。檜

垣小記と菅家のおりしとを配りしと菅  
府の樓乃棟斗カサ終小見ゆりし。又ク歎ク多ク守ル此ノ  
所ノ小トく。時ニ撞キ乃チ多ク守ル此ノ也。

世ヨ繼リ之レ此ノ侍ハ白ク居易クガ遺レ愛シ守ルの侍ハりし也。  
於テ之レ時ニ博シ士トもつひハくシく

親ク音ノ寺ハ在リ筑前三竺郡法相宗也。元明天皇和銅  
二年二月草創。天平十八年六月供養。導師玄肪僧

正チ此ノ時ニ玄ノ肪ノ藤原廣嗣ガ靈雞小あくレ也。其ノ後ニ滿チ  
誓セ法師加テ修理云々。百練抄云康治二年六

月廿一日太宰府親音寺堂塔燒亡。此ノ寺天智天皇  
以後光明皇后以往五代聖主相續草創御願也也。其ノ兵

離家三四月落淚百千行万事皆如夢時々期彼蒼  
此ノ詩在菅家後集菅云太宰府小つり也。此ノ詩ハ憶也

のレ後ハ少シく。多ク文小ハ仰彼蒼と云々

眼目ハ北關小悲とりあつし。今日ハ何れ  
眼目と云々しり戸とりとし。此ノ詩ハ感あくしと云々也

一條院御宇正曆五年勅使と筑紫安樂寺不遣  
と云々也。正一位太政大少不贈号りり。勅使庶前小

於テ詔書と云々上りし。天下ノ愛有くと云々也。昨  
為北關被悲客今作西都雪耻尸生恨死歡其奈我

今須望足護皇基也  
已上見聖曆記及ヒ  
小關とハ此ノ詩也

云、為給いち事有と云く、昔々の恨しハ神の  
生の時ハ時々の過る不恨つことと云く、  
死しての歎とい費ト云ひく、後々々  
何々と恨び給ふこと、天祚の由を云て、今  
ころハ内裏と云後す、一と云り

△天滿陽感ぞめ、ころころ、云満とい天祚  
後足のと、陽感とい陽ハ神と感ハ感  
意と、天祚の由を云て、是ト云、此の  
ころと陽感といこと

△弟もあを皆成佛ハ芭蕉、栴檀もあふ、  
世のたの味なり、一田村小波と、おひの玉ハ

名とい波とい、白たま乃祚ト

白たまハ勢臣の祚と、春彦と云く、水野及ヒ  
高社の撰社ト云、祢宜補任云祢宜外從五位  
下神主春彦在任十六年又云渡遇春彦天御中主  
三十六世孫也即神主二門大内人高主六男也兼  
平三年十一月廿辭職讓男晨晴天慶七年正月九  
日卒蓋管三品在世之時有幽契睦故為弟一撰社  
也然今略不記社官謂於太宰饗酒醴之翁者亦也  
翁名のち翁名ト云、一と云りや

函村集云翁名ハ白たま乃翁と云く、

或云胡弓なるもの其の美名也  
澄翁畧云 胡弓なりといふ物也  
思ふにやう少く、くらくなりと云ふ

○此物の形を以て小ゆん久の物也  
之方の之乃思戸の律也  
久思ハ羽衣也

律也ハ之物也

琴瑟ハ千歳小記也

琴ハ笛ハ羽衣小記也 和琴ハ東琴也

和琴ハ云々 和名類聚抄云天平元年十月七日

木伴淡等附使監贈中将衛督房前卿之書所記也

體似箏而短小有六絃俗用倭琴二字

又千歳小も記也

缶乃及者 詩宛丘篇曰坎其擊缶 漢徐幹論

曰聽黃鍾之音知擊缶之細也 風俗通義曰缶瓦

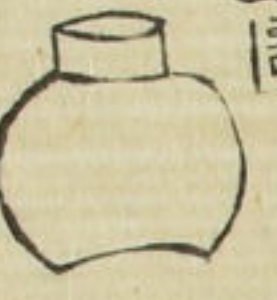
器所以盛酒漿秦人鼓之以節歌也

事物紀原曰唐太中初年郭道源善是以筋擊之

詩大全孔氏曰易離卦云鼓缶而歌是樂器坎卦云

樽酒簋或用缶又是酒器左傳

缶之同



襄公九年宋災具綆缶則又是汲器然則

缶可節樂若今擊甌又可盛水盛酒即今

韓神催馬樂

韓神といハ律系欵の類乃採物欵

十首の内小韓神と云り其強小本司りま  
ゆふこふらりうけしきしきかしのうしき  
せんやうしきき未しきしきしきしきしき  
らてしきしきしきしきしきしきしきしき  
此方と云しきしきしきしきしきしきしき  
又曰苟小あり神法乃名と

延喜式云園韓神宮内首居園神一座韓神二座  
梁塵愚案抄云うしきしきしきしきしきしき

神樂歌ハ庭燎の一首採物方十首大前  
張七首小前張十一首星歌三首雜歌七首  
愚案抄云此方のねらりの中然るふるの  
ねらりしきしきしきしきしきしきしき

催馬樂ハ律歌二十五首呂歌三十六首  
多を催馬と云し愚案抄云得る系ハ心  
り法出らり調物と云義有へはさめし  
時民乃にききしきしきしきしきしきしき  
得る系ハ名付らしきしきしきしきしきしき  
るハ調物おがらるるしきしきしきしきしき  
らしきしき愚案抄真云催馬樂の譜ハ一  
系た大は乃時ふと云し律呂乃方と

定めしきりたりと云々 或云此、身立ちくふりしと  
後、多羽洗集く梁塵秘抄と名つけしゆあり。  
と云よ一系、律呂の抄と一編ひて、愚案抄と

名付給ふと云々 我云、從馬床の想名也。韓律ハ律  
系採物十その内也。物と云、律ハ韓律傳る事  
つけらるる也。但、律系傳る事と云、之を  
あきらむる也。

△笏拍子 於庭上立樂之時打之或ハ三席御遊御  
舟樂の時小拍りするなりと云々 是多餘情云、  
時音よハ、五音と周と郢曲の人ハ、笏拍子  
少くうへふりたりと云々 私云、我ら、奏曲

系、是らうとて、時、笏拍子と用申りし、是らう  
古事談云、後一條院御時、清暑堂乃、所、律系、小  
任、御可取、拍子、少く有り、る、小、際、時、後、行、ハ  
の、小、被、座、ら、り、る、小、筋、と、か、一、違、く、氣、色  
多、濃、る、中、と、せ、し、ん、ら、う、小、吹、而、筋、と、お、く、被  
取、拍子、小、任、あ、え、ら、う、忍、ま、く、妙、所、同、く、  
然、ら、う、事、早、て、後、つ、ら、り、出、る、ハ、御、沙、汰  
ひ、か、し、同、ら、ま、し、ハ、そ、こ、に、ら、る、ら、る、道、に、あ、ひ、て  
ゆ、こ、と、被、座、ら、る、と、云々

笏ハ、廣韻曰、一名、手板、品官所執、天子、以、玉、諸候、以、  
象、大夫、魚、鬚、又、竹、士、木、也 矣 秩名曰、笏、忽、也、有、事、  
記、其、上、以、備、忽、忘、也 矣 周礼曰、諸候、象、大夫、魚、鬚、

道相侍

七五

士以竹晋宋以来謂之手板西魏以後五品以上通用象牙矣 徐廣曰長一尺二寸濶三寸厚五分矣 覽初要集云元正天皇養老三年職事全典已上把笏其五位已上牙笏六位已上木笏木同四年五位已上通用白木笏矣

庭燎のうけや 庭燎といはれぬ那の笏一乃 笏を庭火といふ其の笏小

一尺二寸濶五分一尺二寸濶五分のうけや色分ありり 此の笏を庭火の曲と名つゝあてゝいひゆり

祭塵秘抄 庭燎者 神代卷云天照太神入天石窟八十万神於岩丸前覆誓禮奉庭燎作俳優相与歌舞 今依新小たのく庭火といふ

よりゆりこ 詩經庭燎篇曰夜如何其夜未央庭燎之光 注孔氏曰庭燎者樹之干庭燎之光明司烜

供之樹干門外曰太燭門内曰庭燎矣

星をまつりりい遊以柳あけの玉垣い之田小忌乃 神老の波いさゆふ流と

七徳双調七拍子 葉とらふ今此不七拍乃序前 よて 露玉と養とらあふ七拍小節く七拍

双調七拍子といつつけり 體源抄云秦王破陣樂中曲新樂乞食調曲一名神功破陣樂 又曰七徳舞有七拍子各



尤疑七德意裝束如昆沙門云云七德者左傳云夫武者禁暴戢兵保大定功安民和衆豐財言武力有七德唐太宗皇帝誅隋代暴逆致天下泰平故歌舞其武功功已上體源抄白氏文集曰武德中天子始作秦王破陳樂以歌太宗之功業貞觀初太宗重制破陳樂舞圖詔魏徵虞世南等為之歌詞名七德舞自龍朔已後詔郊廟享宴皆先奏之矣  
通鑑註曰太宗為秦王時破劉武周軍中相與作秦王破陳樂曲及即位宴會必奏之以百二十八人彼銀甲執戟而舞凡三變每變為四陳象擊刺往來後

更名七德舞矣

雙調ハ拾芥抄云双調呂木音四月調子矣

雙調抄云双調と云事と云調と云一ノ下

と云調と母とて生とる事なり小双調と

と云也 觀世極意抄云双調ハ月出夜調

子也春之月の調子小定心方角小定心也

也本性と定心五腕より肝の腕也其

色と云ことと云 世阿弥集云後流の調子

双調也昔ハ盤涉を用ひ盤涉ハ水性なりハ火

難と退くらぬ也今双調小定心なり双調ハ水

性也云の調子ハ月出夜調子なりと云

と云七拍子ハ 觀世極意抄云早一ノ拍子

うかうあさの中はなりし。志さうし。志がけ。是を  
七柏子とくし。れえ拾芥抄及経源  
抄。秦王破陳系ハ乞食調のふし。此を  
多小七。億双調とつららふ。ふり。此の  
藤と屈し。と佛とくや。ひ

大論曰礼有三品。一口但称南無是下品。礼二屈膝  
著地頭頂不着地。是中品。礼三九輪著地。是上品。礼  
千秋樂。万歳樂。多小。此を

法の蓮と安州乃枕り。法乃造とい。法をさ  
座席とくし。一。法蓮小ハのふり。こ。乃縁を

性靈集曰。敬為凶息。周忌聊設法。蓮礼供三尊。無  
安妙の枕。圓守小。何少。此を

二味のぬい。定家。百八煩悩ハと并守ふ。此を  
成後



一 授之。子此枕を以て眠らむ。万志の如くあらんと  
 其枕青磁の如く其の端は竅有り。盧生首と俛く  
 是の枕を竅を以て入る。大明也。乃乃と竅の中へ  
 入と。忽吾家小ゆり。数日有と。清河の崔氏の女と  
 娶。明多進士小擧らんと。登第と。渭南の尉と有る。  
 俄に監察御史に遷。起居舎人知制誥に轉じ。三年  
 一と。同死と典じり。陝牧に遷。河南道の採訪使と  
 命じ。微と京兆尹と有。又戎狄起り。御史中丞  
 河南の節度小除せり。大と小戎虜と破て。四  
 有り。吏部侍郎に轉じ。戸部尚書御史大夫に遷。  
 故有り。獨孤の刺史小賤と有。之と多ありと。傲て  
 者侍と有。又。後。中書門下平章事と有。後  
 言せり。後と友と歩せり。驩別と流と。教多一と  
 有り。後進と中書令と有。燕国公小封せ  
 らる。此。時子五人。孫十余人有。盧生年八十ありと  
 病と。命終と。是と欠一伸して多と有。其  
 其。乃。修。邸。舎。の。有。呂。翁。も。其。傍。の。座。を。主  
 の。蓋。り。泰。し。と。熱。せ。ざ。り。同。有。り。盧。生。乃。多。乃  
 多と。呂。翁。の。後。と。後。と。多。と。多。と。盧。生。が。一。次  
 の。多。と。多。と。

沈既沈枕中記異同録  
 太平廣記見へる

▲浮世の縁ふりしひとく多と有り  
 世と多と祝と出離生死の乃と有り

後撰  
あつたけのよふ初め多らとよとよあひと

蜀のよ乃傍小盧生とよる者あり

盧生ハ枕中記云少年盧生

蜀国ハ大明一統志六十七卷云四川成都府古為

蜀国秦置蜀郡漢分置廣漢郡云云唐改為益州云

天竺初改為蜀郡

茫然 盛久よ後と

よとよ楚国の羊飛ふよまよと知識のよとよ

大明一統志七十卷云四川夔州府羊飛山在萬縣

西南五十里相傳昔有人学道于此常養二羊忽一

日戒童子云勿放羊童子放之羊冲天而去因名

知識ハハ河般若狂日能說空無相無作無生無滅

法及一切種智念人心入歡喜信樂是名善知識

私之枕中記ハ盧生ハ相争ハ呂翁とゆふと此後

一統志四云呂僊祠在邯鄲縣北二十里

一大事ともあひと

法華方便品日唯以一大事因縁故

出現於世 天台大師釈云一中諦大空諦事假

諦 又云一即法身大即般若事即解脱此三法

衆生本具為因諸佛顯示為縁出世元意祇為此

△心又やちと越田けべ 亦移小波と

△野くまこくま里まろく 長明海乃記云十日豊河

とまろく。野くれ里くまろく。こまこい。野の

あしとまろく。野くれこまこい。野の

のいそく。伊豆。必不乃多小野くまこく

まろく。大野記十に云く。伊豆の府を

まろく。今夜野七里。七里と越りく。まろく

上下 畧

△心又やちと越田けべ 亦移小波と

△心又やちと越田けべ 亦移小波と

史記正義曰耶鄆洛州縣也謂趙都也

前地理志曰張晏云耶鄆山在東城下今屬磁州洛

州肥鄆縣本耶鄆縣地有耶溝矣 一統志曰耶鄆

縣在廣平府城西南五十五里本戰國時趙都秦置

耶鄆郡漢廢郡為縣屬趙國曹魏屬廣平國 下畧

△儲ハそ成ハす及ヒカ 耶鄆の枕ヨリ

枕中記小其枕青磁而兩の端ヨリ竅アリ。呂翁囊の

中ヨリ出シテ盧生小技クシタ。

△二村多のあり宿り、千考ノ源と。勅使ハ吳服小波

△まろくかやまの輿 玉ハ兵孫の泡ク

説文曰輿車底也 周礼曰輿人為車車以輿為

主 詩詁曰輿輶軸之上加板以載物

耶鄆

今葉子を名を名の素不の車と輦と云く輿ハ  
車の輿く有輪車とつひを痛輿と云く  
▲素花の花も一時の 白氏文集小槿花下日自為  
栄と云待とあくせと云

雲龍閣 天鼓よ出と云

▲阿房殿 史記曰始皇以先王宮廷小乃宮朝宮渭

南上林苑中先作前殿阿房東西五百步南北五十  
丈上可以坐万人下可以建五丈旗周馳為閣道自

殿下直抵南山表南山顛以為關為複道自阿房渡

渭屬之咸陽以象天極閣道絕漢抵宮室也離宮三

百惟帳鐘鼓美人充之矣

括地志曰秦阿房宮亦曰阿城在雍州長安縣西北

一十四里顏師古云阿近也以其去咸陽近且号阿

房矣 前漢賈山傳曰阿房之殿阿房者殿之四阿

皆為房也矣

▲庭よハ令狼の砂と云 帝釈の新住喜見城の

有秋くののこし又 弥陀經曰黄金為地矣

▲阿方の門色の玉の戸と出入人と云

○我宿ハ菊賣布小阿ハ蘇方阿方の門色よ令と云

▲阿や名小阿ハ寂光の都を見城の

盧生が夢中の秋禾ハ寂光の都及を見城の樂

よと云しと云

寂光の如、名義集云常寂光即妙覺所居、上界

觀普賢菩薩行法經曰時空中声即說是諸刹迦牟

尼佛名毗盧遮那遍一切处其佛住处名常寂光、矣

四教義云破一品微細無明入妙覺位永別無明、矣

母究竟登涅槃山頂諸法不生般若不生不生名大

涅槃以虚空為座成清淨法身居常寂光土即圓教

佛相也、矣 觀經疏曰常即法身寂即解脫光即般

若此以不遷不變名常離有離無名寂照俗照真名究

矣 喜見城、佛祖歷代通載曰妙高山頂上三十

三天中央城曰善見純金取成矣 三界義曰忉利

天者亦名三十三天住蘊迷盧山頂山頂有宮名善

見城、亦名喜見城有千門中有金城高一由旬半用

百一宝嚴鑄是天帝釈所住也、矣

千貨万貨の如宝の如とつゝひくさうけお

說文曰貨財也、矣 鄭康成曰金玉曰貨布帛曰賄

錢穀曰財、矣 唐劉晏曰為轉運使能權万貨使天

下、魚是貴賤、矣

千戸万戸の旗乃あ、 說文曰戸護也半門曰戸

象形又外曰門内曰戸、矣 韻會曰民居曰戸、矣

史記趙世家曰以万戸都三封太守千戸都三封縣

令、矣

▲天小色うきと地ふびく高のなまもあびと

邪邪



夫小色めましくいとの其の所の及うくとくは紫  
ひぐく雷しハ雷ふうくとくそい籟こ比籟とくは

莊子齊物云汝同入籟而未同地籟汝同地籟而未  
同天籟入籟則比竹是已地籟則衆竅是已天籟則  
人心之自動是已矣 杜詩注云笙竽為人籟水声

為地籟風声为天籟 河圖曰風吹物有声曰籟矣  
張景陽七命曰百籟群鳴聳其山劉良注曰百籟謂

林木孔穴激風成声矣

東下之十余丈下白浪ふとつろそくい令の月陽とさ  
ましくふふ十余丈小令の山とつろそくいまうらひ  
の月陽とさとさんとうり

一統志五十六曰江西吉

安府龍泉縣西有金山東有銀山二山為龍之雙角  
文畧

長生殿の裏小いま秋とぬらう 貴老ふはと

漿といつろそくいとけい 陳嘉謨本草曰漿酢也炊

粟米熟投冷水中浸立六日味酢生白花色類醬故  
名矣 韓退之句曰拳瓢酌天漿 觀魚量壽經

曰瓔珞中盛蒲桃漿密以上王 觀魚量壽經

沆瀣の盃とくは同とくは仙家の盃とくは

沆瀣の盃とくは同とくは仙家の盃とくは  
沆瀣の盃とくは同とくは仙家の盃とくは  
韻會曰海気也一曰沆瀣北

方露氣也兵 王逸楚辭六氣註曰冬食沆瀣北方

夜半氣兵 文選相如大人賦曰呼吸沆瀣兮食朝

霞兵 文集曰一盃沆瀣兵 私之也咽下沆瀣ハ化

入家の盃とらるの未考

菊の酒 ぬま将よ記と

▲秋ふらふらひのそらりるもの せいりるもの名に

花むすたゆるたのふたをよするりるなるいしほを便りし

▲流るる菊ののりふいふれくそくそいふえんそら

菊の流るる曲水の宴エニしひくけり。曲水の月

三日し。巻老よ記と

▲菊衣の花の後とひりて

和書正史要云菊衣十月十一月晴着用之菊色々在  
人情兵 衣色同云菊衣ありて白く表紫と。丸

月よ菊之其介らるるの菊らりひるる菊、

つらりとくありりし

▲我宿の菊乃は菊りる菊よ幾世つりてあらと見

拾遺集秋之部ホトシナ元補あり 幻を云と菊のよさとい乃

宮の裳をゆる屏風よ九月九日の布しき

奥義抄を伝ふの菊乃菊つりりく潤くらるるの

あらくそ

▲吾ハ其露もりくやんと 博物志曰其露天酒也  
其凝如脂其甘如飴兵

十一 郡郭



已上岷江入楚 日本紀曰雄略天皇七年求雅媛吉備  
上道女為女御是始也 矣 唯茲女侍の去位以

と二位之位よむと云ふ也 矣 更衣ハ唯茲女侍之去位也 矣

凡更衣ハ天子降衣と云ふは漢の  
よりハ漢武帝始と云ふ史記及漢書ハ

紀朝臣し魚女授後四位下拍系天皇更衣也是始  
也 矣 清涼殿記云更衣其負十二人以下不備其

數尚侍宣下諸司著禁色 矣 此云ハ其ノ數十二人と云ふハ必ズ教有るに  
是カ者 一ノ侍也 女友も其の侍也 云々

云々の數が云々不叶 更衣ハ云々の友と  
云々の事 内侍の云々の諸司小宣下一

更衣小禁云々を云々の事 云々を内侍宣下と  
云々 已上岷江入楚

▲更衣の初ハ云々十午板多の間ハ粟飯の一次の事なり

異同録曰主人方炊黄梁為饌 矣

松中記小ハ黍と云ふ炊の字ハ一と云ふ

周書曰黃帝炊穀為飯 矣

又炊字作饗也 說文曰饗存謂之炊饗字白象執

飯口為竈口并推林内火徐曰取其進火謂之饗取

其氣上謂之炊トウヤ矣

。枕りのふすのきのき秋も粟飯りく後とんけ漢

穀人間の有根と葉下り小百年の炊ふも命終

といふ多なり

樂天詩云百年富貴夢中竟一旦榮華風前塵矣

止觀曰如夢見七宝親屬歡樂覺已追念不知在何

處矣 熟の字の安室よほと

あまごをくくくくく 鴉鷺記云南無三宝

く骨をもあて能をもとら初い念仏上なり

南無の美盛よほと之まの自然居士及致不信

信の世としさとりんえくくくくくくくく

私云盧生耶那の枕ふよりくふ十年の多あさめ

さとりを昇くくくくくく 枕中記本多廣記あふ

是外此等ハ遠の作共の文あるくく二人は五

尼を信くすんんんの枕乃多のふ十年の景花

をさりぬ只多の世の樂ウレヒのあくくくくくをさとり

えくくくくくくくくくくくくく

曉乎拙云彼楚玉の盧生ハ耶那の里ふあり一

多ふよりく云常をさとりくくくくくくく

若く識といわがせけんく

安宅

盛長私記云文治三年二月十日、伊予守義顯<sup>ヨシノブ</sup>、  
 家<sup>ウチ</sup>の追討使の害<sup>ガイ</sup>を遁<sup>ノゾ</sup>き、頃日又觀<sup>ミ</sup>山<sup>ヤマ</sup>に逸<sup>カク</sup>せ居<sup>ル</sup>。  
 遂<sup>ニ</sup>伊勢英治と号<sup>ス</sup>て、奥<sup>ウチ</sup>に居<sup>ル</sup>。相<sup>アヒ</sup>後<sup>ノチ</sup>高<sup>タカ</sup>延<sup>ノブ</sup>、  
 素<sup>ヒ</sup>く山<sup>ヤマ</sup>に居<sup>ル</sup>。姿<sup>カタ</sup>を假<sup>カ</sup>り、山<sup>ヤマ</sup>の魚<sup>イサ</sup>、僧<sup>ソウ</sup>、復<sup>タガ</sup>、章<sup>シヤウ</sup>、兼<sup>ケン</sup>、意<sup>イ</sup>、  
 仲<sup>ナカ</sup>、教<sup>ケウ</sup>、之<sup>ノ</sup>人<sup>ト</sup>と見<sup>ミ</sup>、遠<sup>トウ</sup>と<sup>シ</sup>て、於<sup>コ</sup>合<sup>カ</sup>之<sup>ノ</sup>十<sup>シユ</sup>余<sup>ヨ</sup>人<sup>ト</sup>、剛<sup>コウ</sup>く加<sup>カ</sup>、  
 賀<sup>カ</sup>、小<sup>コ</sup>、よ、あり。家<sup>ウチ</sup>小<sup>コ</sup>加<sup>カ</sup>、其<sup>ノ</sup>作<sup>シヤク</sup>人<sup>ト</sup>、宿<sup>シュク</sup>、櫻<sup>オウ</sup>、分<sup>ク</sup>、ハ、義<sup>ギ</sup>、顯<sup>ケン</sup>、山<sup>ヤマ</sup>、  
 卧<sup>ワ</sup>の姿<sup>カタ</sup>を借<sup>カ</sup>り、奥<sup>ウチ</sup>に下<sup>シ</sup>向<sup>ムカ</sup>の中<sup>ナカ</sup>を穿<sup>ス</sup>て、安<sup>ヤス</sup>家<sup>カ</sup>の意<sup>イ</sup>、  
 一<sup>ヒト</sup>、新<sup>シン</sup>、冥<sup>メイ</sup>と稱<sup>ネ</sup>へ。此<sup>ノ</sup>意<sup>イ</sup>の族<sup>シユ</sup>人<sup>ト</sup>と改<sup>カ</sup>じ。於<sup>コ</sup>中<sup>ナカ</sup>山<sup>ヤマ</sup>卧<sup>ワ</sup>、  
 於<sup>コ</sup>てハ、柝<sup>シヤク</sup>、ぬ、一<sup>ヒト</sup>、て、食<sup>シ</sup>、後<sup>ノチ</sup>と、逃<sup>ニゲ</sup>、色<sup>シキ</sup>、より、於<sup>コ</sup>中<sup>ナカ</sup>、  
 於<sup>コ</sup>中<sup>ナカ</sup>、山<sup>ヤマ</sup>卧<sup>ワ</sup>、小<sup>コ</sup>、人<sup>ト</sup>と、名<sup>ナ</sup>、を、告<sup>ツク</sup>、告<sup>ツク</sup>、同<sup>ドウ</sup>、名<sup>ナ</sup>、と、言<sup>イハ</sup>、せ、分<sup>ク</sup>、  
 於<sup>コ</sup>中<sup>ナカ</sup>、山<sup>ヤマ</sup>卧<sup>ワ</sup>、小<sup>コ</sup>、人<sup>ト</sup>と、名<sup>ナ</sup>、を、告<sup>ツク</sup>、告<sup>ツク</sup>、同<sup>ドウ</sup>、名<sup>ナ</sup>、と、言<sup>イハ</sup>、せ、分<sup>ク</sup>、

安宅

あつらひの山郎とて、搦捕く獄舎に入。吾智の山郎  
此、吳詔小をく。龍舎とら者六七人、及一、千、  
各、園、下、の、り、守、り、と、此、山郎の義經らりた  
誇動とて、人、連、後、章、と、是、東、大、寺、道、立、修、く、  
後、系、坊、の、法、(勅進と。巡、の、山郎、於、合、二、百  
余、人、也。是、山、法、乃、り、お、羽、奥、(勅、を、と、り、山、郎  
也、と、云、爲、櫻、分、さ、や、。而、一、定、と、実、の、山、郎、と、  
い、人、夫、山、郎、の、法、と、も、兼、て、修、急、も、角、も、計、に  
し、一、と、て、彼、山、郎、を、と、り、山、郎、と、同、言、さ、せ、り、不、  
後、章、仲、教、兼、意、の、教、の、学、通、武、義、坊、も、  
修、小、后、修、く、。多、年、の、学、者、ら、り、。何、の、夷、  
山、郎、の、の、り、と、云、さ、ら、り、。結、句、修、山、郎、と、云、く、  
最、と、あ、り、り、不、。そ、り、り、更、不、り、。吾、人、と、う、は、想、て  
汝、意、の、山、郎、不、此、義、と、り、掛、け、。多、人、と、思、り、。是、  
坊、の、山、郎、を、と、り、と、件、の、山、郎、と、い、あ、。山、郎、の、法、  
乃、り、と、ひ、め、さ、り、り、。爲、櫻、分、大、と、不、修、と、修、と、  
修、と、。修、小、後、修、り、と、い、は、た、。何、共、一、と、て、此、  
而、と、通、さ、ん、と、い、ひ、。後、章、は、何、く、。吾、東、大、寺、勅、を  
の、不、修、と、巡、の、中、兼、り、。若、勅、進、修、あ、り、  
守、は、爲、櫻、が、如、く、も、を、知、つ、ん、と、り、り、。後、章、  
茂、の、中、の、天、命、止、視、と、一、卷、の、あ、り、と、。勅、を、修、  
修、。言、あ、り、は、修、と、修、と、。及、よ、り、と、。文、

安宅

章河華と飾と其、正に得たり。是れ九人の及つ不  
小北と名付、かゝ究竟の事とあひつる事ありて、

此上の終る事と即ちありて、悉く通つたり。新撰  
の事加へたり。之十余人の者其危と命と即ちして、

仲の實事と適きたり。富樫、かゝ初を怪ふありて、  
その怪ふ事、今危くあひく、氣を怪ふ事

よくよく去る事小実事と通つたり。 文畧

弁慶状云雖天高釣雖地厚不荒踏漸恐通之処折

節被弁慶守富樫而叩弁舌敵陳而探當迴文笈少

不駭捧逆遂披露道鱗口下著當国天命期 上下

此は、此の何れの二宮と云。又、此の身は、此の身。又、

状よあり。此、此の事、此の事、此の事、此の事、

の實の事、此、此の事、此の事、此の事、

記、東、鑑、等、よ、い、り、

△此、此の事、此の事、此の事、

異本義經記云加賀國富樫、かゝ家直が園下 下畧

大系圖云富樫、かゝ家直二郎家經子也 云云

盛衰記云利仁將軍と人の男とけ、嫡男在越前云

初、次男在加賀云富樫三男在越中云井口云

此、富樫、かゝ家直も此、末、あ、り、富樫、かゝの、名、加

此、石、川、部、あ、り、



盛長れ記云加兵匠人富樫介の以前未嘗義仲に  
相属して居たりしが系族の軍より打負く義  
仲討道徳のしほ存すも逃れ極く難きを以て  
とあり。隆會殿のい家人より列し居たり。其  
城より不及僅に總令の地を揚ぐ。加兵は居候  
隆會あり別く作らざりし。今交縁を  
搦捕の忠告として中殿を退かざりし。して  
下族高等も皆此義小同意し。安宅の意不  
新雲と接し。加賀守の佛系より記す  
叔も親朝義仲に中不和あり。世傳より  
兄弟不和の事あり。左傳曰兄弟雖有小忿不  
忘親也。父子兄弟等の不和あり。天祚地祇も  
人を助け守り給ひ。必し飢饉疾疫兵乱等の災  
難おこす。仁王經曰六親不  
和天神不祐。頼朝の御年記に屋島に  
△判及後十二人の作り。△奥といふ。義仲記より後十六七人といふ。盛長  
私記より部令之十余人といふ。又異本より十二人  
又山門の傍。水の方と共に部令十六人といふ。  
丁本云常陸坊海存を以て先達とす。筑前房  
長寛とす。P. 111. 年表を以て筑前坊とす。

盛長れ記云加兵匠人富樫介の以前未嘗義仲に  
相属して居たりしが系族の軍より打負く義  
仲討道徳のしほ存すも逃れ極く難きを以て  
とあり。隆會殿のい家人より列し居たり。其  
城より不及僅に總令の地を揚ぐ。加兵は居候  
隆會あり別く作らざりし。今交縁を  
搦捕の忠告として中殿を退かざりし。して  
下族高等も皆此義小同意し。安宅の意不  
新雲と接し。加賀守の佛系より記す  
叔も親朝義仲に中不和あり。世傳より  
兄弟不和の事あり。左傳曰兄弟雖有小忿不  
忘親也。父子兄弟等の不和あり。天祚地祇も  
人を助け守り給ひ。必し飢饉疾疫兵乱等の災  
難おこす。仁王經曰六親不  
和天神不祐。頼朝の御年記に屋島に  
△判及後十二人の作り。△奥といふ。義仲記より後十六七人といふ。盛長  
私記より部令之十余人といふ。又異本より十二人  
又山門の傍。水の方と共に部令十六人といふ。  
丁本云常陸坊海存を以て先達とす。筑前房  
長寛とす。P. 111. 年表を以て筑前坊とす。

判及殿も自ら和房勝運と付給ふ。河尾の系  
系。伊勢三郎と云ふ。その下の子。然井を帝の流部  
の系と云ふ。その下。その下。跡坊と云ふ。大正坊。  
仙見房。その下。其の下。假名と付ふ。その下。  
判及の屋傳。山伏の葛城と記す。

▲藤の衣ハ藤掛の病けと云ふ。その下。その下。

紫雲ハ大塚ハ深山と云ふ。其の下。その下。その下。  
拂りたぬのと云ふ。その下。葛城と記す。

○この名所の昔話と云ふ。山伏の紫雲掛衣と云ふ。

衣雲内大臣

▲某の字義ハ体本。越路ハ山姥と記す。

○この名所の昔話と云ふ。山伏の紫雲掛衣と云ふ。

河門手合と云ふ。是ハ高祖功羽未敵也と云ふ。

河門と

詭言命在營外。回事急乃持鐵楯入到營。其後  
止の字ハ常良權入と云ふ。

弟は延喜の勝也

門役人カ入トシタラ

多丸

人カクズシタトアリ

河門の

この下。その下。その下。その下。その下。

▲伊勢三郎駿河次郎。河尾常陸房。并其の

伊勢三郎ハ 異本義往記云義盛ハ伊勢三河  
次高俊と云ふ。其の下。其の下。其の下。其の下。

判及原も自ら和房勝運と付給ふ。行是ハ京の  
系。伊勢之命とせんドの系。然并る帝ハ流部  
の系と云々。その介と上野坊と総坊。大正坊。  
仙見房。等々。移くは傾名と付ふ。等々。  
判及ハ屋傳。山依ハ葛城ノ記と。

▲旅の衣ハ藤掛の病けとて種々あり。等々。  
葉無ハ大帯ハ深山等。ハ。高深と云ふ。等々。  
拂りんための上等。等々。葛城ノ記と。

○この名也の若治とつて。山依の葉掛衣。等々。  
衣笠内大臣

▲某の字義ハ神木。越路ハ山姥ノ記と

叙と接く舞。候々。ハ。等々。頂ノ記と。等々。  
下小。等々。等々。と。樊吟。等々。等々。等々。

破と押入。等々。等々。史記列傳三十五。等々。  
鴻門ハ高帝紀。註孟康曰。在新豊。東十七里。旧大道

北下坂口。名。等々。  
私云。等々。此。河を。等々。ハ。義。等々。等々。等々。

等々。等々。等々。等々。等々。等々。等々。等々。  
等々。等々。等々。等々。等々。等々。等々。等々。

▲伊勢三島。駿河。次郎。行。尾。常。隆。房。并。等々。  
伊勢三島ハ。異本義。往。記。云。義。盛。ハ。伊。勢。三。島。河。邊。  
次。高。俊。等。子。之。高。武。等。等々。等々。後。等々。等々。

安宅

人と成くと。又、堂と改む。下、文畧。長門本、家物  
諸之伊勢三島。又、堂の目えり。ごらの呪りけ  
き。ハ、ト、ト。盛衰記之。又、堂の、神部を落り。ハ、  
あふ、あふとて、暇ととと、故に伊勢、由より。そ  
時の、後人、首、後、以、命と、似、付、玉、中、の、武士、迄、切  
り、つ、れ、の、又、堂、於、麻、山、よ、迎、籠、て、戦、ひ、つ、れ、た、大、勢  
り、ま、る、る、の、終、小、自、害、と、と、と、と、

駿河次島ハ異本義経記之駿河次島清重事。又  
行駿河玉浮島が系と通ひ。終り。時、攝人、有、と  
以、連、終、通、相、終、と、り、如、何、者、と、と、名、を、与、終、終、  
付、ハ、駿、河、の、玉、浮、島、下、二、島、清、重、と、名、を、与、終、終、  
して、又、終、よ、終、は、と、と、と、

行、是、ハ、早、ハ、島、弘、常、行、是、次、島、終、春、弟、也。経、春、ハ、終、  
物、の、高、後、也。弘、常、ハ、弟、の、もの、高、後、と、堂、表  
記、よ、ハ、八、高、終、春、と、と、

堀、尾、ハ、早、ハ、十、島、権、次、房、二、人、終、よ、終、と、

常、清、房、ハ、異、本、義、経、記、之、常、清、房、海、島、事、因、城、  
弟、の、出、家、刑、部、の、律、師、と、と、と、強、力、者、の、義、刑、  
部、と、と、と、又、行、法、眼、が、終、よ、在、阿、志、を、通、  
累、致、つ、ら、と、と、又、家、造、付、の、時、又、終、小、属、一、常、  
清、房、海、島、と、名、を、与、ト、と、と、并、又、ハ、并、并、又、よ、終、

所、ハ、ハ、二、月、の、十、日、の、夜、月、の、終、と、と、と、

二月十日の豊長私記及び其後記等如斯く多岐に  
渡りて文治元年十一月六日の夜訪を以て山玉へ  
落し給ふと云。東鑑同く。二月八日雲林院に渡りて  
月の如くは祿員の如し。

是や此の如くゆりも別色ての如くもあつたお飯の  
此、旁縣丸に渡りて

ふくくとお飯でまゝいふの如くさ。下りの如くは  
あつらん

古今集四部部よりおくおと。河をえあひの  
うらり。おとあつてくとしてたつてあつらん。

原惟成の立別色つり名所の如くさ。今ハハハハ  
如のさつといつてくとしてたつてあつらん。

海津の浦より着より。小辺江に甲斐津は云

。有乳山名所のさふおと。海津の里より。敷原つ

東をまわくゆりバ。篠目た云。万葉より小作之眼。細行

同云。夜のゆりことさ。曉世の事乃ゆりて。船の  
めせつん田の河をさつて。

。志のめふ起く。山より久安とまら。竹のをらの事

海津色つ有乳山。荒血山の近江紙おの境に。甲斐

如く。海津より敷原へ越りて里の山守あり。河  
羅千のた云。又荒血山をさつて。

○鄂古 久田の神不渡茅延つくる氣山界の漢宮宮くくるは  
後水尾院御歌大概抄之此宮の流山云久田神河ら  
山いあまふよ。越前の名詞くやこの冊をともりく  
あくら山いゆ。猿の神く。河ら山いふ山い  
秋より香のありあくく

▲氣飯の海宮居久くく神垣也

此浦の越名と氣飯の海と云 此宮居の敷賀久津  
く河らくあふ小川流して交他々あふじりひる  
井いあふ河ら地方百回余河ら

諸社根元記云延喜神祇式云越前国敷賀氣比神  
社七座氣比神社者宇佐同体也仲哀天皇興行宮

謂筭飯宮

神名帳頭註云風土紀云氣比神宮

者宇佐同体也。八幡者應神天皇之無跡氣比明神  
仲哀天皇之鎮座也。矣 日本紀云仲哀天皇二年

二月癸未朔幸角鹿即興行宮而居之是謂筭飯宮

○この海もあふ河らくくすのまふれきてるあは雲の約舟

▲松の木乃茅山 越前本茅山と云く。靈表紀よ本色

城と云。新保より本茅山と云く。二十六年有。敷賀の内

▲松の木を切板小川くつつけり。板も松山を

板も松山を切板小川くつつけり。板も松山を  
敷賀く。板も松山を切板小川くつつけり。板も松山を  
岩色之里あり。本海もく。靈表紀よ虎板と云。

安宅

松山の湯尾と浅水の居たの方小尻より義貞  
小玉軍の討所生利友保が薙一泳有り也。  
但板取ハ松山より三里也

▲河洲のあり乃浅洲津や 頼朝在府中橋井之間  
浅生水江浅あり也。

▲未三玉の淺あり 同玉坂井部也。海乃より一里あり  
の海をこし

▲あーの藤原波うけて 加茂江沿部藤原ハ安宅の  
浦と立花のるこ。兼原ハ里也。又近江常陸小田原  
新古 世中ハ浮りもけー兼原や藤原ハわきハ妹多小田原

▲あひく筑のいけーといちのあこふもより

筑ハ花の雙とといけり。安宅ハ加茂石川部也。兼  
原より三里也。一浪よ家重が新買ハあこふ小田原。

▲書ゴ流乃タシ 思ら若也ハ小田原もあ

とをこ 天台大師釈妙法云言語道断心行所  
滅イ矣 維摩九阿閼佛品曰不来不去不入不  
切言語道断矣

▲一大事 耶耶よれと

▲唯何れーとをのそがゆるうーとどろとぬい  
虫何となく笑をかこりあまんとをこし。

莊子曰虛靜活談寂寞在為矣 論語靈公篇曰在

為而治者其舜也矣

▲あの強力が負より笈とよりしれ肩小かりれ

強力ハ心伏の下移シ。笈とよりり後シ。

説文曰笈本作極矣 韻會曰徐曰極之言筵也今

作笈極即笈字古人多言肩笈謂自肩之也矣

史記蘇秦傳云肩笈從師矣 風土記云笈字士所

以肩書矣 案高野山行人流笈の形亦小等一。從

修驗行者笈と肩と心よのり。是と心伏の笈と

云。よりりの笈とハ形狀異シ 修驗抄云夫修驗

所具、笈者取凡字也從胎藏八葉之中基出六趣

倫之穢土皈入真如寂光之真理義相也口傳曰笈

像悲母之体内相是有皮肉骨以皮裹之皮中穀味

肉也笈極骨也上絡八角母胎八分肉團自性本分

八葉也笈極長一尺八寸十八界横一尺二寸十二

因縁厚九寸九界兩足各一尺十界 文畧

▲眞加ミウカもろもろさうりくくいりさうり

眞加ミウカもろもろさうり。眞加ミウカ小くさうりさうり云へ。眞加ミウカハ

神明の加護をさうり。或ハ眞慮眞感と云小等一。

神代口決云天照太神託宣曰眞ミウカ於加留カス正仁直チキナ

於カ天本登壽ト云云 孝衡曰加護有ニ二種一頭加謂

現身語讚仰其所作二眞加謂ク潛垂覆ス攝不現身語

矣





綱自性不染蓮糸也金剛界者智曼荼羅故中納聖  
教一々表義大綱如此文畧

あや草スゲさくさくをから

菅のさよ那ど修験抄に班蓋と云くあやいか  
さくさくあり又捨蓋と用也増鏡之資朝も心

伏の志似して椽の志小りやと云く云おさそ  
と云く修験抄云修験所具班蓋者佛界薩埵天

蓋慈悲覆護形相也九天蓋者一切衆生住悲母胎  
内載袍衣義表也其形円形者表五位円満之相円

形金界月輪也白綾キヌマシ裏之八葉胎藏也云云

會堂者天盖也雖班蓋可用之文畧

今修験抄云就修験取持杖有三

種差別一者金剛杖二者檜杖三者檐木云云

金剛杖者此三杵之中獨古杵也獨古即護佛法要

樞破魔軍智劍也高祖役行者入胎時母儀夢自虛

下獨古入我口經七箇月誕生依之獨古山伏三形

也云云口傳云金剛杖者役優婆塞三形金胎不二

塔婆也上斂頭金剛界智下方胎藏文字地大也四

方四面顯發心修行菩提涅槃四德方各一寸五分

合而六寸也表地水火風空識六大長同行者之身

量云云檜杖者先達所持智杖也其形円形表二利

円満之義檜者火也火者智也智能摧破煩惱是故

号檜杖云檜木者初入新客杖也凡初度入峯行  
義者每朝結三荷之闕伽水每日運三荷小木故謂  
檜木矣

▲是ハる於東大寺建之乃為小

東大寺ハ續日本紀ト金光明四天王護國寺氏國

分寺氏号ス傳通記トハ大華嚴寺氏恒說華嚴寺

氏城大寺氏云也拾芥抄云東大寺聖武天皇神

龜五年始而造之兵帝王編年記云天平十五年

癸未天皇立願曰我欲鑄金銅盧舍那佛諸智識等

可同心之由被宣下十月十五日於近江國滋賀京

始鑄之不成給同十七年乙酉八月廿三日於大和

▲今ハる於東大寺建之乃為小

修驗抄云就修驗取持杖有三

種差別一者金剛杖二者檜杖三者檜木云

金剛杖者此三杵之中獨古杵也獨古即護佛法要

樞破魔軍智劍也高祖役行者入胎時母儀夢自虛

下獨古入我口經七箇月誕生依之獨古山伏三形

也云口傳云金剛杖者役優婆塞三形金胎不二

塔婆也上劍頭金剛界智下方胎藏及字地大也四

方四面顯發心修行菩提涅槃四德方各一寸五分

合而六寸也表地水火風空識六大長同行者之身

量云檜杖者先達所持智杖也其形田形表二利

田滿之義檜者火也火者智也智能摧破煩惱是故

号檜杖云云檜木者初入新客杖也凡初度入峯行  
義者每朝結三荷之關加水每日運三荷小木故謂  
檜木矣

▲乞ハ而於東大寺建之乃為小

東大寺ハ續日本紀ヨ金光明四天王護国寺ハ国

分寺ハ号ス傳通記ハ大華嚴寺ハ恒說華嚴寺

城大寺ハ云也拾芥抄云東大寺聖武天皇神

龜五年始而造之矣帝王編年記云天平十五年

癸未天皇立願曰我欲鑄金銅盧舍那佛諸智識等

可同心之由被宣下十月十五日於近江国滋賀京

始鑄之不成給同十七年乙酉八月廿三日於大和

国添上郡始鑄之三箇年間奉鑄八箇度成畢高五

丈三尺五寸熟銅七十三万九千五百六十斤白鑄

一萬二千六百三十八斤練金一万四百三十六兩

水金五万八千六百二十兩炭一万八千百五十六

石矣又云天平勝室四年四月乙酉東大寺大佛

開眼有行幸請一万口僧同年東大寺供養矣

私云八十年代高倉院治承四年十二月廿八日罹平

重衡之兵火悉為灰燼後架坊ハ勅有ク淨建ハ之ハあ

るク此ハ法ハ徳ハ之ハハ此ハ時ハのハもハ。又百七代正親町

院永祿十年十月十日信貴城主松永彈正兵火回

祿而大佛御頭燒落有佛坐殿凡百二十年于時東

大寺僧龍松院亮再興志願奉勅許台命勸貴賤建堂新始貞享五年四月二日千僧供養棟上宝永二年四月十日堂供養同六年四月八日矣

▲あるくハ江口客借ハ本橋も初ハ本島ノ江也

▲小港乃 系按越前加賀能也越中越後佐渡合せし

七ヶ小と小港乃と云小方の港ノ枕くり小なるる

小港乃といふ

▲奥秀衡とれしゆ

秀衡ハ藤原秀卿九代嫡孫出羽押領使基衡之子

鎮守府將軍從五位下任陸奥守累代富家太名仁

義勇者也文治四年十二月廿二日卒行年九十二歳

▲夫山依といふは役の優婆塞のゆゑとくけともいふ不動明王のまゝ家とくごり

修驗抄云夫曩祖役優婆塞者毘盧覺王變化不動

明王分身假出真如本覺宮趣大悲利生門然則受

化用於我朝包利益於法界現身相於俗形被慈於

真俗誠是日域并双行者靈驗每窮太士也華嚴經

云從此東方有山曰金剛山彼山有菩薩曰法起与

千二百人俱而為說法云法喜菩薩者役優婆塞

密号金剛山者今葛城是也出月氏国号迦葉尊者

稟如来心印至震且名香積仙人顯生滅不二秘術

来我朝称役優婆塞示十界一如密行誠知三国一

躰聖者隨機應現行者也。秘記云高祖役小角者  
和易葛木上郡節原村人也。父高加茂役間賀介  
麻呂母同氏白尊母夢自天降金色。獨古思入我。只  
忽懷孕人王三十五代舒明天皇御宇聖德三年辛  
卯經七箇月十月廿八日寅刻誕生。自七歲始誦慈  
救咒學究三典教勤三密行滿六度位十九歲時入  
撰別箕面山瀧穴奉值竜樹太土相兼兩部大日秘  
密灌頂三十二葉家入葛木山巖窟居三十餘歲藤  
葛為衣松菓充食驅逐鬼神以為給仕四十二代文  
武天皇大寶辛酉曆六月七日乘五色雲入唐朝終  
益段朝于時年七十三已上

優婆塞ハタ敷又此也。不勤於五ハ長内分又此也。以  
五の之意味ハ此奥又此也

冠イタダとツハ五智の之を冠する十二周縁のひびごととて  
修驗抄云夫山伏者大日遍照智身即身即  
佛覺體也故頭襟者五智宝冠也其形宝形也顯五  
智圓滿内證云云秘記云頭者益明取生頂上襟者  
益明能生妄心十二縮表衆生取具十二四縁其色  
黑色表最初益明無明黑闇煩惱之義也前八分著之  
示不動項上八葉在頭襟之中次長頭襟者是有二種  
一者螺髮形二者滿字形也螺髮形者前結之長五  
尺五智黑色法身不變色相也表佛身相好螺髮也

是名佛部山伏優婆塞形山伏者之次滿字形者後結之  
長八尺表不動頂上八葉滿字者八葉也摘山伏者  
之文畧又云五智宝冠者金色五角也按今直著空  
冠惣而山伏者大日遍照覺躰也於先達之自宿著  
宝冠全並相遠也文畧

五智五佛阿闍室生弥勒釈迦大日也

菩提心論曰五方佛位各表一智東方阿闍佛由成  
大圓鏡智亦名金剛智也南方宝生佛由成平等性  
智亦名灌頂智也西方阿弥勒佛由成妙觀察智亦  
名蓮華智亦名轉法輪智也北方不空成就佛由成  
成所作智亦名羯磨智也中央毘盧舍那佛由成法

界智為本其十二因縁其毒く旧抄よかくり畧る

九會曼荼羅の柿の鈴掛

九會者一印會理趣會降三世會降三世三昧會成  
身會羯磨會微細會供養會四印會是云金剛界九  
會也 柿鈴掛者柿衣也鈴掛者法衣惣名也

修驗抄云柿衣者赤色並文也住母胎八分肉團之  
中姿也開悟解脫前即自性本分心蓮也實是不苦  
不樂並相法身極位也至先達位著之上九布金剛  
界九會下八布胎藏八葉也二露表福智二胎或白  
色或青色長並定量下畧 曼荼羅の玄味ハ多麻

胎藏曼荼羅の脚キとヒ





是為阿字字相矣

阿字義云阿字者一切如來

誠實語所謂一切諸法并因并果本来清淨圓寂義

而身即佛の心法を定まらざる如しん

秘記云入峯修驗意我等色心六大即胎金兩部躰性故不動行者當位證舍那覺體色即五大本有胎藏理躰心即識大本有金剛智性也色心不二處衆生本有佛體也此不二位曰即身即佛山伏也又云談三種即身一即身成佛二即身即佛三即身即身始本二即身成佛與即身即佛顯教始本偏理取談同性佛對并義即身々々一義當道不共極談也實是修驗即坐正覺當位佛果源底也矣

阿五の照覽計くふ然也持現の淨界とゆふ人

異本を述べた云加賀小呂權介家直が冥而を過り  
ゆふ家直が弟、彼及次第而此家、其場は在るべきか  
めりりしと名權大とふ計くくゆのあり信をま  
後とゆふものも、不淨の身くしてを付りさるる  
阿五の照覽計難く、箇くはきて然時持現の後  
ゆふんとく極りゆと、臨臨此を傾てゆふ  
通しりりし

阿五の不動明王、真俗雜記云明王者明

者光明義即象智惠所謂忿怒身以智力摧破煩惱  
業障之主故云明王矣 然野持現ハ亦極小

▲<sup>コ</sup>阿毘羅<sup>ヒ</sup>時<sup>カ</sup>欠<sup>カ</sup>と教珠さしりとありありあり

胎発客の日月のまをく。庵ハ海令と。阿毘羅  
叫欠ハ地水火風空と。吾達原ハ法を。教珠ハ  
自然居チ不記と

▲<sup>コ</sup>度の中より彼岸のまを相一と云ふれあり。知を悟と名付

身經記ハ希き又動を悟としむと云。又、望を  
私記ハ叙山の悟後章續之と云。彼岸の是  
相ハ庭訓彼岸尺素彼岸の類ハ一。但、望を  
私記ハ後章度の中より大旨止規と一と云ふれ出  
しと。知を悟と稱し。多きを又ハ續上教を  
と云。知を悟ハ文選ハ劉越石知を表あり。

▲<sup>コ</sup>明玉の照映行くふ然也。持現の淨界と云ふ人等。

異本身經記云加賀玉局樞介家直が冥所を過り  
ゆふ家直が身。汝及次命既家其場ハ在てんが  
めより一と。局樞大と不部一と。此のあり悟を  
後ハゆふものと。不淨の身一とてを付りまん。明  
玉の照映行難一。箇一ハ定て然也。持現の後  
終ハんと。極より濃く臨臨改を傾て  
通一と云ふと云ふ

明玉とい不動明玉之 真俗雜記云明王者明

者光明義即家智惠所謂念怒身以智力摧破煩惱  
業障之主故云明王矣 然野持現ハ每揚不記と

▲阿毘羅呼欠と教珠さしくとありのめい

胎発客の日月のまをく。庵ハ油令也。阿毘羅呼欠ハ比水火風空也。母連系ハ法也。教珠ハ自然居ち不記也

▲笈のゆりり以外のおまけ一考されおし初ま法と名付

笈經記ハ希まの意を性としむと云。又笈長私記ハ叙心の傍後章後之と云。以外のおまけ初ハ庭訓以外又素以外のおまけハ一。但笈長私記ハ後章笈のゆりり大旨止観と一考されおし初ま法と性稱し。まを又ハ續上ケ教白と云。初まを性ハ文選ハ劉越石初まを表あり。是後笈五層ハ大旨ゆりり初まと云。初まハ初まの二字ハまをめすしむと云。観笈量壽經曰深信因果讀誦大乘勸進行者

▲せんつとありんんまバ つとハ熱のま

笈量壽經曰當熟思計 後漢馬君傳曰計之熟

下字集云日本世俗呼情字作熟之讀不得其意可

檢之 ありんんまバらちひんんま。惟のま。又文選ハ仰顧伏以為意者と云史記ハ怒と云

▲大恩あるの秋乃月ハ涅槃のまをふらま

大恩あるとハ秋乃月と云。秋乃月ハ涅槃のまをふらま。大恩あるとハ秋乃月と云。秋乃月ハ涅槃のまをふらま。大恩あるとハ秋乃月と云。秋乃月ハ涅槃のまをふらま。

とへんこと。法華信解品云世尊大恩以希有事憐

愍教化矣。涅槃のをもふくむことしへ教する入滅を

とく。涅槃經曰二月十五日臨涅槃時以佛神力

出大音声矣。遣教經曰於娑羅双樹間將入涅槃

矣。涅槃者。本經曰涅槃言不生槃言不滅不生不

滅名大涅槃矣。智論曰槃名為趣涅槃名為出永出

諸趣故名涅槃矣

▲生死長夜のうらみとく多き事とて人もの

唯識論曰未得真覺恒処夢中故佛説為生死長夜

廣古。長く夜のまのゆかり侍といぬるるるるの曉の

▲武烈帝と名つけしもの

帝王編年記云聖武天皇聖德太子命号奈良帝亦稱

勝室感神皇帝文武天皇太子母曰入皇夫人藤原

宮子贈太政大臣正一位不比等女也。太室元年辛

丑誕生和銅七年甲寅六月廿八日庚辰立為皇太

子年四十神龜元年甲子二月四月甲午受禪同日

即位于太極御年二十四御宇廿五年自神龜元年

甲子至天平九年戊子都平城宮云云

天平勝室八年五月二日崩御年五十六奉葬大和

国添上郡佐保山陵矣

▲寂蓮の婦人よ別と。此婦人の依人と指く云哉。

有きの后光明會后ハ大仏建立の時ハあり命と

又言武の母とる系、夫人とくた、そくく  
お後の河お遠せり。

▲<sup>ト</sup>念慕やうくく涙泣眼くく

念慕ハこひとくく。韻會云戀慕也

增韻云眷也念也通作攀。漢外戚傳云攀々顧

念。壽量品曰衆見我滅度廣供養舍利咸皆懷

戀慕。淚泣者。說文曰涕泣也

廣韻曰涕目汁也。詩傳曰自目曰涕

說文曰岳声出涕曰泣。涅槃經曰涕泣盈目

▲淚玉とつゝぬく。速異記云南海中有鮫人室水居

如魚不廢機織其眼能泣則出珠

涙玉は初唐楚王の夢の夢、こい月より水精とつゝ  
ぬくこらやう小つこらこら泣涙みどく

涙氏アケマキニ総角云我泪をいむ小ぬのうん

○存る念合くくくくをと系わく我泪をいむよわうえ

▲<sup>ミ</sup>こひとる遠小ひくく。老乞のこひとる根の

逢よひくくく人佛建立あつこ

▲<sup>ル</sup>盧舎那佛と建立と。盧舎那佛建立供養いと示記と

賢首梵網疏曰梵本盧舎那此云光明徧照照有二

義一内以智光照真法界此約自受用義二外以身

光照應大機此約他受用義。浄覚雜編云盧舎

那宝梁經翻為浄滿以諸惠都尽故云浄衆德悉圓

故云滿矣

▲後多坊重源法書と勅云と

重源上人ハ左馬太夫李重孫右衛門太夫李能息男黑谷法然弟子也仁安二年入唐至明州見舍利瑞光經三年歸朝其後為東大寺再興勸進于時建久六年六月六日於東太寺寂云云  
東鑑云元曆二年し己三月七日東大寺修造事殊可抽丹誠之由武衛被遣御書於南都衆徒中又被送奉加物於太勸進重源聖人訖所謂八木一万石沙金一千兩上絹一千疋矣

▲一紙半後の事財乃軍ハ

涅槃經曰以一紙半錢志可願德果矣  
大宝積經曰一牧紙施人令書經福滿三千界矣

▲海令誓首敬白 海令ハ實也小説也

釈氏要覽云誓首謂屈頭至地故也矣  
又云誓首謂首至地誓留少時也矣 周礼太祝弁九拜一曰誓首拜中最重臣拜君之礼矣  
文粹云藤原道長供養寺塔願文曰啓白如此弟子某歸命誓首敬白 上田各

▲月よりハ能也小とさりふととせひつらよ

さりふとハ指也。四りん志也。司馬長卿上林賦曰率乎直指呂向註直指謂行也矣

今も丹波大原を社宮へ奉りて大原に奉りて奉りて  
 能登国 旧事本紀云能等国造志賀高穴穗朝御  
 世活目帝皇子大入来命孫彦狭嶋命定賜国造  
 帝王編年記云養老二年戊午五月割越中国置能  
 登国 夫 大和年紀云能也此也此也此也  
 大和年紀云能也此也此也此也此也此也  
 今ハ登乃字と云なりと云々  
 今ハ登乃字と云なりと云々

▲おのりぬきと云々  
 後とおのりぬきと云々  
 の後とおのりぬきと云々  
 長  
 一尺二寸と云々  
 一尺二寸と云々

とむとろく 東鑑云上総立身兵未懐中第一  
天條お刀ヲ矣 子家お清云素家坊をいふ  
のト小萌惹いひの服をいふお刀す人  
いふふいふいふいふ

儘囊扱云是もろくて大ろくを扱ちりてふ  
お刀といふ名をいふものよらんことをいふお  
うろくく人の緩刀を長くうろく扱ちりて

▲カクシ 披祥ハ鶴羽ヨシと生涯ハ安をいふ小はと

▲ミシヒ 衣彦伯三國名臣序賛曰日月麗天瞻之不能行

義在躬用之不匱矣 光明童子因縁経曰日月星  
辰可墜地山石從地可飛空海水測深可令枯佛語  
決定并虚妄矣

凡雅

。さうとていふをいふ月日のいふからぬせん

▲ミシヒ 天台釈曰欲知過去因見期現在果欲知未來果見  
期現在因矣 因果録曰要知前世因今世受者是  
要知後世果今生作者是矣

▲ミシヒ 弓馬の家いふはさうとて 弓馬の家といふ家と  
えと 令義解云宿衛如法便習弓馬者為上矣  
晋紀總論曰弓馬之士驅走之人下矣



▲カリ海を西海の浪小あつめ 源平西海の軍八屋

浪小あつめ

▲春日のあふらうひの波小舟と記せし海へ山脊の  
も蹄もつてぬきの中ふ 凡波小舟と記せし

元暦二年二月十八日春日御坊兵衛助よりあまの  
日・凡波の勢と志のどと。何波はよと記せし

或ハ文治元年十一月大物の浦よりあまの日の時  
魚凡波よ記と逐流ダケラシ度カス船之間波海をやめ  
分勢せしる。此等の事と記せし

山脊のる蹄もつてぬきの中ふ。昔承平  
二月七日一の谷軍の時と記せし。山脊セキといふのせる

うしよあり。春日一の谷のうしよに織揚オリノボ景鴨カモ新  
より貴セメ落し流ふ。仍と山脊といふ。外をの  
比波小流ふと記せし。蹄といふのひつめ  
と。徳のつとておぼえ遠りしつた此等の事ふ  
みくつてけり。

詩人玉屑云雪晴山脊見汝

浅浪痕交オチ

▲海がーのり夕浪の立ちるもやと記せし  
うと三年の程もろく記せしホロホうひく世の  
平家の一門悉く滅亡せしるゆえに  
神の軍切よ記せし。元源氏の事と記せし  
うしよと記せし。勢チツキヨ最と記せし。もとあふ



後をさすまよふやとてさそいせんしてあるお水  
しひゆりうりし。

前漢李陵傳曰李陵伐匈奴四面射

矢如雨下士卒多死陵弓矢俱尽虜騎数千追之陵

曰吾面目何以報天子遂降矣

紫式部日記云ささくのり

まどろくそめいりくわりのいほひんそ

源氏物語ふもめいりくわ

くまいりり 是服よはと

よしおして 派江入楚を居し之居まりり

侍園楽わしとゆりり

あふらち居せる取い居御しそくおさおさ有りり

曲水のよえらんらん 貴老ふはと

多来弁まよいと塔の遊信 上塔の東塔西塔横川と

ちこ。蓋多よはと。弁まよえよは居ると遊信とい

新ふ是と止と遊信の信とま

傳大土録曰遇遊僧遇門乞食

すい延年の時乃初号 或云延年の舞ハある舞

樂の時最初よあるまこ。此舞乃始ハ淨室より記

きり。古い高部小嶺共よに和守人年始乃四礼勅

しよ。門主淨意と波下。其時は常しく舞りると

き。其後高部小嶺大會おとるふ時ハ必ス延年の

帝と奏と。今の昔と。徳と。但し。南都茶師。亦ふ  
此帝と。徳と。今と。昔と。甲斐。必身。延。一。毎。年  
十月。御。新。海。よ。世。の。い。り。り。

▲ろりの滝のあり日にてんた地と流るり

そハ式<sup>ニキ</sup>之<sup>ニキ</sup>妻の畑と。流るりしハ文造呂延海註<sup>ニキ</sup>溜

々水流<sup>ニキ</sup>貌<sup>ニキ</sup>とる。妻世酒妻よと。玉一と。と。ふ。が

し。く。び。り。の。酒。妻。毎。よ。ろ。り。の。滝。の。あり。と。う。い

し。し。長門本云清水寺の法師よ観音房坊

玉房令別房力立房とて何人何り中畧茅の

え乃とくか大も力とゆくと廻くおとよ打

破と延曆寺の額ととらたとてうわやま

滝のありと事とく真祓寺の流徒のゆふを入ぬ

▲たつろりのふゆとる雲との 下畧 松云新寺よ流徒

▲虎の尾とやと毒蛇のゆと遊るるん蛇とく

あやうとくゆとく

周易履太家曰履虎尾不咥<sup>ニキ</sup>人亨<sup>ニキ</sup>矣

心地観経曰毒蛇口害<sup>ニキ</sup>一身<sup>ニキ</sup>矣

木論曰如虎尾踏<sup>ニキ</sup>如毒蛇首踏<sup>ニキ</sup>矣

。ゆと捨ん流徒のたてくいしは虎尾とや虎のゆのあり

▲産奥国 自然居ち小流と

